

# 富田城下町の復元的考察

## 1. はじめに

慶長 5 年（1600）に出雲国へ入部して富田城を本拠とした堀尾氏は、慶長 12 年頃から同 16 年にかけて松江城と城下町を建設し、本拠を移転した。富田城はその後も支城として機能していたと考えられているが、やがて慶長 20 年の一国一城令により破却されたと推測される。

しかし、富田城の膝下に広がっていたと思われる富田城下町は、すべてが松江に移転したのではなく、一定部分は引き続き町場として存続したと考えられる。そして、寛文 6 年（1666）の大洪水によって、富田川（飯梨川）の流路が大幅に変化し、町の大半が流失・水没したと思われる。松江藩松平家初代の直政は同年 2 月に死去し、後を嗣いだ子息の松平綱隆は、弟の松平近栄に 3 万石（広瀬藩）、その弟の松平隆政に 1 万石（母里藩）を分与していたので、大洪水が起きた当時の富田町は、近栄の支配が始まったばかりの時であった。近栄は、翌寛文 7 年から町の移転事業を開始し、寛文 8 年には富田川西岸に新たな陣屋町（広瀬町）を建設した。

一 川向富田去午の秋洪水にて満水残の町五町程御座候、此古町を居屋敷広瀬の方へ引越申度奉存候、以上、

寛文七年丁未二月廿一日

松平上野介<sup>（近栄）</sup>

（『島根県史』第 8 巻、1930 年）

富田川河床遺跡における考古学上の成果を除き、中世の富田城下町に関する史料は、全く残されていないと言わざるをえないので、その復元的考察はきわめて難しい。ただし、中世富田城下町を何らかの意味で引き継いでいたと推測される 17 世紀（寛文 6 年以前）の富田町に関しては、富田川河床遺跡から大量の出土品が確認されているだけでなく、断片的な史料によって、わずかにその痕跡をたどることができる。17 世紀の富田町を追究することは、中世富田城下町の実像を明らかにする重要な手がかりであると考えられる。そのため、以下の点が課題となる。

- （1）17 世紀の富田町について、文献史料による復元を試みること
- （2）17 世紀の富田町は、中世富田城下町から何を引き継ぎ、何を引き継がなかったのか、検討すること
- （3）富田川河床遺跡における考古学上の成果や、明治初年の地籍図に残された地名情報をふまえながら、中世の文献史料に残された富田周辺の状況を、富田城下町との関連においてとらえること

中世富田城下町に関しては、妹尾豊三郎氏・蓮岡法暲氏（広瀬町教育委員会 1977）・原慶三氏（同 1992）による研究が重要と思われる。本稿は、それらの手法と成果に学びながら、あらためて中世富田城下町の復元的考察を深めることを目的とする。

## 2. 「富田町帳村」の成立 ～文献史料から17世紀の富田町を探る～

正保2年(1645)の「正保出雲国隠岐国絵図」(国立公文書館所蔵)には、楕円で囲まれた各村の名称が出雲国全体にわたって記されており、当時の出雲国内にどのような村が存在したのかを知る手がかりとなっている。

それによれば、「富田古城」の北西側、富田川東岸に当たる場所に、「町帳村・山帳村」と記されている。その周囲には、東側に「古川村・廣嶋原村」「新宮村」、南側に「牧谷村」、富田川対岸に「石原村」「祖父谷村」「廣瀬村」などが、それぞれ記されているので、「町帳村」「山帳村」は、富田城の菅谷口・御子守口の周辺など、中世城下町の所在地として最も可能性の高い場所に位置していたと思われる。このうち「町帳村」は、延宝2年(1674)能義郡富田町帳御検地帳(広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収)によれば、正式には「富田町帳」とも称されたことが知られる。また「山帳村」については、明治5～8年(1872～1875)の製作と思われる「第七拾四區能義郡町帳村全圖」「出雲國能義郡第七拾四區 町帳村繪圖」(いずれも広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収)に、町帳村の南東側(富田城跡の丘陵部分)に隣村として「山形帳村」の名が記されている。

「町帳」や「山帳(山形帳)」などの村名の由来は明らかでないが、他の村とは異質な名称である点は、注目される点である。あくまでも推測にすぎないが、先行して存在した町場とその後背地に対して、かつて地料銭等を賦課するための2種類の帳面が存在し、それを支配の根拠とした周囲とは異なる領域(町帳に基づいて支配された町場と、山帳に基づいて支配された後背地)が存在し、近世に入ってその遺称が村名として引き継がれたのではないかとと思われる。「山形帳」は、もとは「山方帳」であったのかもしれない。

この「富田町帳」こそ、17世紀富田町の所在地(具体的には、町場の中心部分を含む村の領域)であったと推定される。残念ながら町場の実像を示す史料はほとんど残されていないが、断片的な情報を収集することは可能である。17世紀における富田町の実像を知るために、重要な拠り所と考えた史料は、以下の検地帳類である。

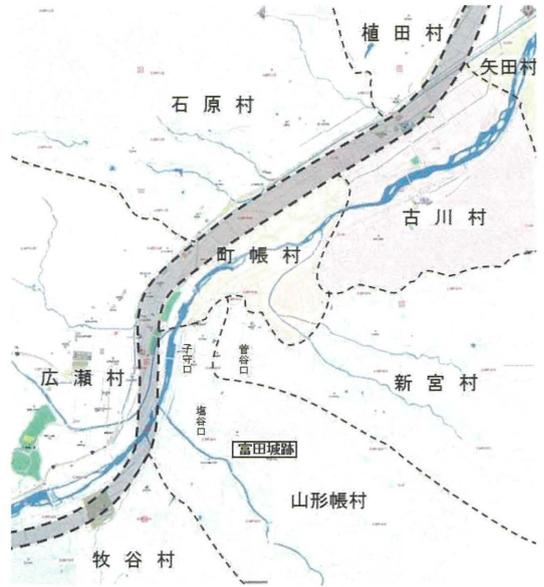


図3 近世富田町帳村周辺図

- ①寛永3年(1626)富田庄内廣瀬村御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-151)
- ②寛永3年(1626)富田庄内廣瀬村御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-151)
- ③寛永3年(1626)富田庄之内牧谷村御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-155)
- ④万治2年(1659)能義郡古川村御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-131)
- ⑤万治2年(1659)能義郡古川村御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-132)
- ⑥寛文3年(1663)能義郡之内石原村御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-110)
- ⑦寛文3年(1663)能義郡之内石原村新田新島御検地帳(「中国五県土地・租税資料文庫」8-112)

- ⑧寛文 8 年(1668)富田町引料米帳 (安来市教育委員会『安来市史料調査報告』2009 年)
- ⑨寛文 8 年(1668)広瀬町屋敷帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-153)
- ⑩延宝 2 年(1674)能義郡富田町帳御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-158)
- ⑪延宝 2 年(1674)能義郡富田町帳反新田御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-159)
- ⑫元禄 2 年(1689)広瀬町屋敷検地帳 (安来市教育委員会『安来市史料調査報告』2009 年)

①～⑦は、寛文 6 年の洪水より以前のものであり、富田町が富田川東側に存在していた時期のものと考えられる。そして⑧～⑨は、洪水によって被災した富田町の屋敷地が、広瀬町へ引き移された際のものである。特に⑧は、おそらく 17 世紀の富田町の内部構成を全体的にうかがわせる史料として貴重である。

ただし⑧は、富田町の全体を示すものであるとは言えないし、各屋敷の間口の長さ(「面」)があまりにも整い過ぎているので、必ずしも洪水以前の状態を忠実に反映したものとは言えず、あくまでも移転経費負担の割り当てを目的に作成された帳簿ととらえておく必要がある。現時点では、これ以外に富田町の内部構成を直接うかがわせる史料が残されていない。しかし、富田町に居住していた人々は、周辺の村々にも田畑を所持しており、特に近接する広瀬村・牧谷村・古川村・石原村の検地帳には、名請人として数多く確認することができる。以下では、そのような事例を列挙する。

---

①寛永 3 年(1626)富田庄内廣瀬村御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-151)

②寛永 3 年(1626)富田庄内廣瀬村御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-151)

---

①②は、富田川西側の広瀬村の検地帳(①は「田方」、②は「畑方」)である。これより 60 年ほど後には、この村の中に広瀬町が建設されることになる。

この当時、富田川を挟んで富田町帳の南西方向に近接していた廣瀬村には、とりわけ数多くの富田町住人が田畑を所持していたようであり、名請人として検地帳に登録されている。広瀬町教育委員会『富田川河床遺跡 発掘調査報告』(1977 年)には、それに基づいて富田町居住者の集計表を作成している。ただし、各名請人が富田町居住者であるかどうかは、史料の性格上、その肩書きから推測するよりほかに手だてがなく、当然のことながら確実な証明が難しい。

以下では、富田町内の個別町名と思われる肩書きや、商職人の屋号と思われる肩書きを手がかりとして、あくまでも富田町住人である可能性が高い人物を列挙する。ただし、全てが富田町住人ではない可能性や、取り上げなかった名請人のなかに富田町住人が他にも存在した可能性は、排除できない。また、肩書きは異なっても、同一人物である者が含まれている可能性は高いが(特に、居住地が富田町内全体を示すと思われる「町」とのみ記されているものなど)、これも判断できる手がかりがないので、便宜上別人物として列挙する。  
(■は難読文字。以下同じ)

《居住地名》

本町	源右衛門	五右衛門	善右衛門	治兵衛	藤左衛門	三蔵	新右衛門
	四郎兵衛	与右衛門	壱郎右衛門	仁右衛門	太郎■五	善吉	
	作右衛門	次郎五郎					

上町 弥右衛門  
 中町 与右衛門  
 下町 弥右衛門  
 板屋町 小又 孫兵衛 助左衛門 善太郎 彦十郎 三郎左衛門 源兵衛  
 茅屋町 助六 又市 太郎右衛門 宗一郎 助藏 宗三郎 宗四郎 源四郎  
           宗十郎 彦右衛門 彦四郎 又右衛門  
 馬口郎町 孫四郎 作右衛門 源十郎 六 源次郎 助五郎  
           与五郎 ■兵衛 源七郎  
 魚町 喜左衛門 又六 新五郎 孫兵衛 助左衛門  
 六町目 仁左衛門  
 ひきゝ町 久藏 次郎左衛門 次郎右衛門 小助 又三郎 与三郎 善右衛門  
 後町 又右衛門  
 町 善三郎 三藏 次郎左衛門 藤右衛門 二郎右衛門 弥右衛門 藤左衛門  
       源右衛門 五右衛門 四郎兵衛 小又 新右衛門 孫右衛門 助市 助藏  
       孫三 作右衛門 六左衛門 源四郎 宗右衛門 彦兵衛 又左衛門 与四郎  
       藤次郎 新五郎 与次郎 六藏 喜作 仁左衛門 宗十郎 孫四郎  
       太郎右衛門 介六 (助六) 弥兵衛 与三郎 助五郎 彦左衛門 孫十郎  
       助左衛門 宗左衛門 与兵衛 源次郎 寿洞

《職名・屋号》

目代 喜右衛門 (紀右衛門) 弥次郎  
 紺や 清兵衛 新右衛門 次郎右衛門 与右衛門 源次郎 清次郎 又市  
       与吉 彦四郎 善右衛門  
 大工 宗四郎 番匠 石井 油 清兵衛 宗右衛門 小三郎  
 扇子屋 与吉 市右衛門 とき 市左衛門 孫右衛門  
 くしや 四郎兵衛 とうち 又左衛門 一せんそり 五郎右衛門  
 なへ屋 善右衛門 かたな 宗左衛門 金場 藤次郎  
 とうふ屋 助六 ゆひた 喜左衛門 宗四郎 いはしや 市右衛門  
 たくミ 太郎左衛門 むろや 三右衛門 らつそく 太郎右衛門  
 かうちや 三右衛門 宗左衛門 かぢ 助市 ゆかた 次右衛門  
 田中ノ 宗五郎 面高屋 治兵衛 (次兵衛)  
 やぶ 宗左衛門 孫三郎 井つか 弥右衛門  
 和泉屋 宗意 杵築屋 作右衛門 平田屋 七左衛門

このうち、「目代 喜右衛門」については、寛永年間の堀尾忠晴給帳（「円成寺文書」『新修島根県史 史料篇 近世上』）に、「九石 同（富田領）町目代 喜右衛門」と記されていて、富田町の目代であることはほぼ確実であると考えられる。

宝暦12年（1762）「広瀬町酒場改帳」（「秦家文書」『安来市史料調査報告』2009年）によれば、田中屋・面高屋は天正年間（1573～1592）から、井塚屋は慶長年間（1596～1615）から、それぞれ酒商売をしていたと記載されている。起源の事実関係を確認することは容易でないが、いずれも後の広瀬町に屋敷を構えることとなる家である。

③寛永3年(1626)富田庄之内牧谷村御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-155)

③は、富田町帳から見て、富田城跡を挟んだ南方に位置する牧谷村の検地帳である。この検地帳にも、広瀬村検地帳と同様に、富田町住人と思われる人々が、名請人として記載されている(原慶三 1992)。以下は、名請人の肩書きに、個別町の名前があるもの、商人の屋号であると推測されるものを、列挙したものである。

板屋町 忠兵衛	本町ノ 与吉	ときや 又二郎
平田屋 次右衛門	あふらや 与左衛門	かやノ町ノ 喜兵衛
なへや 善右衛門	あふきや 市右衛門	かみや 孫四郎
かぢ 助市	葉や 理右衛門	おも高や 治兵衛
ひ木ノ町 喜右衛門	あふらや 惣右衛門	かぢ 平兵衛
ときや 又三郎	こうや 善右衛門	

肩書きだけでは判断できないが、富田町住人である可能性のある者は、これら以外にも存在したと思われる。また、同じ年に作成された①②広瀬村検地帳の名請人と同一人物であると思われる事例(なへや善右衛門・あふきや市右衛門・かぢ助市・おも高や治兵衛・あふらや惣右衛門・こうや善右衛門)も確認できる。

④万治2年(1659)能義郡古川村御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-131)

⑤万治2年(1659)能義郡古川村御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-132)

④・⑤は、富田町帳の北東側に隣接していた古川村の検地帳である。④には、名請人として「町ノ 理右衛門」を確認できる。これは、9年後の寛文8年の⑧富田町引料米帳に見られる利右衛門(下本町)、⑨広瀬町屋敷帳に見られる成田屋利右衛門(本町)、延宝2年の⑩能義郡富田町帳御検地帳に見られる成田利右衛門と、同一人物か、もしくは世代の異なる同じ家である可能性が高い。

⑥寛文3年(1663)能義郡之内石原村御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-110)

⑦寛文3年(1663)能義郡之内石原村新田新畠御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-112)

⑥・⑦は、富田町帳から見ると富田川対岸の正面に位置する石原村の検地帳である。この村の検地帳にも、対岸に位置する富田町帳住人が名請人として多数記載されている。これから5年後に当たる寛文8年の⑧富田町引料米帳および⑨広瀬町屋敷帳と比較すると、以下のように一致すると思われる人物を確認できる。

町ノ 源左衛門	→⑧ 187 下町 源右衛門	⑨ 234 清水町 紙屋源右衛門
町かち 佐(作)三郎		
町 孫作	→⑧ 180 下町 孫作	⑨ 134 下町 蔵元や孫作
町かち 久左衛門	→⑧ 97 鍛冶町 久左衛門	⑨ 154 鍛冶町 鍛次屋久左衛門
同断 助惣■		
同断 助市・介市		
町 善兵へ	→⑧ 132 鍛冶町 善兵衛	⑨ 191 鍛冶町 森山屋善兵衛
町 次郎右衛門	→⑧ 136 鍛冶町 二郎右衛門	

	⑨ 47 板屋町 井筒屋次郎右衛門
	117 下町 らうそくや次郎右衛門
	126 下町 ながや次郎右衛門
	195 鍛冶町 馬口郎次郎右衛門
町 与吉	→⑧ 194・197 下町 與吉 ⑨ 109 下町 黒坂屋傳吉
町 久蔵	→⑧ 116 鍛冶町 久蔵 ⑨ 173 鍛冶町 さなだ久蔵
町 彦三郎	→⑧ 164 魚町 彦三郎 215 清水町 彦三郎
	⑨ 224 魚町 桶屋彦三郎 250 清水町 家作彦三郎
町 六郎右衛門	→⑧ 221 清水町 六右衛門 ⑨ 246 清水町 松江屋六右衛門
かち 小介	
かち 孫作	
同 次郎兵へ	→⑨ 162 鍛冶町 鍛冶屋次郎兵衛
町 市介	→⑧ 162 魚町 市助
	⑨ 222 魚町 いぐや市助 236 清水町 紙屋市助
田中屋 五兵衛	→⑧ 67 上町 五兵衛 ⑨ 70 本町 田中屋五兵衛
町 傳吉	→⑧ 196 下町 傳吉
同 久次郎	→⑨ 178 鍛冶町 田中屋久次郎
同 源二郎	
同 喜三郎	→⑧ 137 鍛冶町 喜三郎 ⑨ 196 鍛冶町 家作喜三郎
町 万蔵	
同 蓮教院	
同 治兵衛	→⑧ 157 魚町 治兵衛 ⑨ 216 魚町 田邊治兵衛
かち 六右衛門	
同 利右衛門	→⑧ 41(萱町)・81(上町)・94(下本町) 利右衛門
	⑨ 41 板屋町 こにご利右衛門、84 本町 あべ屋利右衛門
	99 本町 成田屋利右衛門
町 五兵衛	→⑧ 158 魚町 五兵衛 ⑨ 217 魚町 安井屋五兵衛

言うまでもなく、所在地の表記方法の違いや、名字や屋号を欠いた表記の人物同士を対比させることは困難なことであり、これらの人物比定は厳密なものではない。あくまでも全体的な傾向を把握できるのみであり、また、おそらく世代交代や改名によって、追跡できない人物も残されているが、隣村に田畑を所持する富田町帳の住人はこれ以外にも存在したと考えられる。

以上の①～⑦に記載された人名の肩書きには、富田町を構成した個別町の名称ではないかと思われるものが、いくつも確認できる。その名称を列举すると、以下のようになる。

本町	上町	中町	下町	茅屋町	板屋町	魚町
ひきゝ町	馬口郎町	後町	六丁目			

⑧寛文8年(1668)富田町引料米帳 (安来市教育委員会『安来市史料調査報告』2009年)

⑧は、寛文6年の洪水で被災した富田町を、対岸の廣瀬村へ移転する際の帳簿であり、旧富田町の全体的な姿をうかがわせる貴重な史料である。そこに記載されている屋敷地数は、225筆におよぶ。また、住人たちの所属する個別町名は、以下のように記されている。

かや(茅・萱)町	上町	下本町	下町	鍛冶町	魚町	清水町
----------	----	-----	----	-----	----	-----

⑧に記された町名が、①～⑦に記された個別町名と必ずしも一致しない理由は、定かでない。ただし、①～⑦に記された地名は、異なるレベルの区域名や別称が混在していた可能性があり、①～⑦に現れなかった他の個別町が存在した可能性も高い。また、⑧が旧富田町全体の実態をそのまま反映したものとは言えないことも、その要因の一つと推測される。

⑨寛文8年(1668)広瀬町屋敷帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-153)

⑨は、広瀬町建設にあたって作成された屋敷帳であり、おそらくは計画段階の構想を強く反映したものではないかと推測される。そこに記載されている屋敷地数は、257筆にのぼっている。また、住人たちの所属する個別町名は、以下のように記されている。

板屋町	本町	下町	鍛冶町	魚町	清水町
-----	----	----	-----	----	-----

このうち、⑨「板屋町」の住人は、⑧「かや町」の住人とほぼ一致する。⑨「本町」の住人は、⑧「上町」「下本町」の住人と概ね一致する。⑨「下町」「鍛冶町」「魚町」の3町の住人については、⑧「下町」「鍛冶町」「魚町」の住人と、それぞれほとんど一致する。⑨「清水町」の住人(31軒)は、⑧「清水町」の住人(10軒)よりはるかに多いが、⑧の10名中9名は、⑨に記された名前と一致している。

旧富田町における個別町名を(その全てであるかどうかはひとまず措くとしても)、何らかの意味で引き継ぎながら、広瀬町が建設されたことをうかがわせている。

⑩延宝2年(1674)能義郡富田町帳御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-158)

⑪延宝2年(1674)能義郡富田町帳反新田御検地帳 (「中国五県土地・租税資料文庫」8-159)

⑩と⑪は、寛文8年の広瀬町建設から6年後に作成された、「富田町帳」の田畑検地帳である。冒頭に触れた推測が正しければ、もともと富田町があった場所のうち、富田川の流路となった場所を除き、移転以前からの米作地・畑作地に加えて、旧町場を耕地化したものを含む田畑について、あらためて検地を実施したものと思われる。その名請人の中には、以下のように、寛文8年当時の旧富田町住人(⑧に記載された屋敷所持者)や、広瀬町住人(⑨に記載された屋敷所持者)が、何人も確認できる。左側に⑩・⑪に現れる人名、中央に⑧、右側に⑨に現れる人名を記す。

こんや 市右衛門	⑧ 82 (上町) 市右衛門	⑨ 85 本町 紺屋市右衛門
鍛冶 市兵衛	⑧ 108 鍛冶町 市兵衛	⑨ 165 鍛冶町 鍛冶屋市兵衛
きやうかく	⑧ 223 清水町 教覚坊	⑨ 256 清水町 山伏教学坊
魚町 五兵衛	⑧ 158 魚町 五兵衛	⑨ 217 魚町 安井屋五兵衛
清水町 次郎兵衛		⑨ 230 清水町 紙屋次郎兵衛

かうや 清兵衛	⑧ 93 (下本町) 清兵衛	⑨ 98 本町 紺屋清兵衛
目代 太郎左衛門	⑧ 61 (上町) 太左衛門 當町目代	⑨ 64 本町 目代太郎左衛門
田中屋 七郎右衛門	⑧ 201 下町 七郎右衛門	⑨ 114 下町 田中屋七郎右衛門
	⑧ 53 (萱町) 七郎右衛門 年寄	⑨ 57 板屋町 田中屋七郎右衛門
横田屋 彦左衛門	⑧ 85 (下本町) 彦左衛門	⑨ 88 本町 よこたや彦左衛門
鍛冶 平右衛門	⑧ 101 鍛冶町 平右衛門	⑨ 158 鍛冶町 鍛冶屋平右衛門
井塚 弥右衛門		⑨ 54 板屋町 井■弥右衛門
成田 利右衛門	⑧ 94 (下本町) 利右衛門	⑨ 99 本町 成田屋利右衛門
水 吉左衛門	⑧ 49 (萱町) (上町?) 吉左衛門	⑨ 52 板屋町 水屋吉左衛門
ながや 九兵衛	⑧ 51 (萱町) (上町?) 九兵衛	⑨ 55 板屋町 ながや九兵衛
米や 三郎右衛門	⑧ 25 (萱町) 三右衛門	⑨ 24 板屋町 米屋三良右衛門
井筒屋 次郎左衛門	⑧ 45 (萱町) (上町?) 二郎左衛門	⑨ 47 板屋町 井筒屋次郎右衛門
かみや 助右衛門	⑧ 33 (萱町) 助右衛門	⑨ 33 板屋町 かみや助右衛門
ながや 七左衛門	⑧ 52 (萱町) (上町?) 七左衛門	⑨ 56 板屋町 ながや七左衛門
かうしや 八左衛門	⑧ 83 (上町) 八左衛門	⑨ 86 本町 麴屋八左衛門
米や 彦兵衛	⑧ 167 下町 彦兵衛	⑨ 151 下町 米屋彦兵衛

特に、⑧・⑨・⑩・⑪に共通して現れる人名については、富田町住人であった当時の旧屋敷地や田畑を引き続き所持していた事例が多いのではないかと推測される。

さらに、⑩・⑪に記された各田畑の穂の木からは、富田町帳のなかに、以下のような小地名が存在したことを確認できる。

町分谷口 毘沙門堂 ■左衛門屋敷 城安寺門前 半助屋敷 ■屋敷餘り ■屋敷上 屋敷内 天神 いか町 六左衛門屋敷 町
---

こうした小地名のすべてが、旧富田町に関連するものかどうかかわからないが、それを含む可能性はきわめて高いと考えられる。

#### ⑫元禄2年(1689)広瀬町屋敷検地帳(安来市教育委員会『安来市史料調査報告』2009年)

⑫は、寛文8年から21年後に作成された広瀬町検地帳である。この検地帳に記されている広瀬町内部の個別町名は、以下のようになっている。また、記載されている屋敷地数は、350筆に増加している。

新町 上町 下町 本町 魚町 鍛冶町 御蔵元町 萱町
----------------------------

江戸期広瀬町の内部構成は、この時期におおむねその姿を整えていたものと考えられる。⑧・⑨に比べて、当時の町の実態に近いものと推測される。

以上、①～⑫の検地帳を手がかりとしながら、17世紀前半に富田川東側に位置したと推測される富田町について、断片的な痕跡を史料のなかに探ってきた。当時の富田町は、かなり多数の個別町によって構成されていたと推測され、また周辺村に田畑を所持して地域に根を下ろした住人たちが、相当数居住していたとみられる。

さらに言えば、⑥⑦と⑧⑨と⑩⑪を比較すると、隣接する村の検地帳に名請人として記載された人々が、富田町住人のごく一部にすぎないことは、おそらく間違いないものと推測される。全般的な人口の増加を勘案したとしても、松江城下町建設以後において、17世紀の富田町には、200軒を下らない規模の町場が存在したとみられる。堀尾氏によって本拠が移転した後も、富田町は一定の規模を保持したまま、後の広瀬町に引き継がれていったと考えられる。

17世紀の富田町には、多数の金属加工職人を確認できる。たとえば、寛永3年(1626)の①②③には、「ときや」「なへ屋」「かたな」「かち」などを確認できる。寛文8年(1668)の広瀬町の状況ではあるが、⑨には、鍛冶屋18(鍛冶町)、鋏ふる屋2(板屋町・魚町)、とぎ屋1(板屋町)、灰吹屋2(板屋町・本町)、鍛次大工1(下町)、さやし1(清水町)が見られ、これらのほとんどは富田町からの移住者であると考えられる。特に、鉄関連の職人が多いことが注目される。

なお富田川河床遺跡からは、17世紀の鍛冶関連遺構・遺物がいくつか検出されている(図6参照)。1982年調査のI区第3遺構面(1605～1630年前後)流砂からは錬鉄2本・火縄銃1点、1981年調査のSB031第2遺構面(1644～1666年の掘立柱建物遺構)から錬鉄1本が、発掘されている。また、1975・76年調査のSB010・SB011・SX005からは鉄滓・工房跡状遺構など、1988年調査のSH01第2遺構面からは江戸時代初期の鍛冶炉遺構が検出されている。

(広瀬町教育委員会 1977、島根県教育委員会 1984、および角田徳幸「流通した錬鉄の形態」(2017年3月10日島根県古代文化センターテーマ研究「たたら製鉄の成立過程」客員研究員共同検討会報告))。

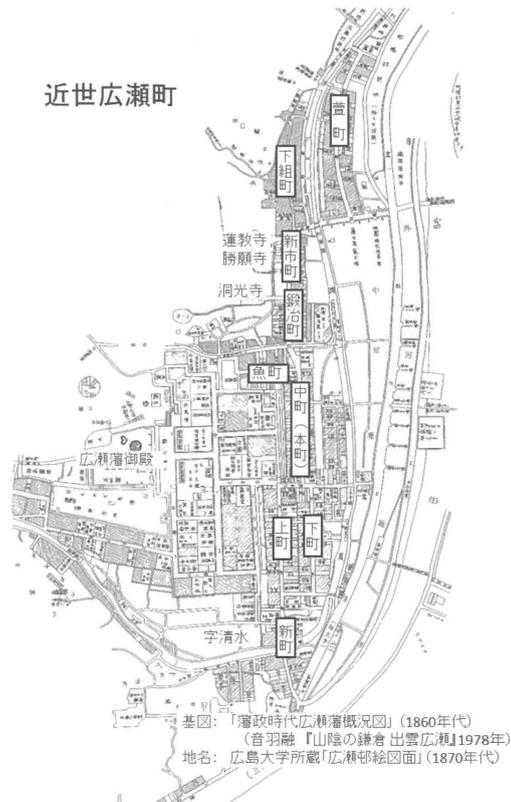


図4 近世広瀬町の内部構成



1982年富田川河床遺跡出土 錬鉄

### 3. 富田城下町から松江城下町へ

それでは、17世紀の富田町は、中世の富田城下町を、どの程度引き継いでいると考えられるだろうか。

この点についても、史料はさらに限られていて、同時代史料による検証はとても難しい。ただし、堀尾氏による松江城への本拠移転や、一国一城令によって、堀尾氏家臣団屋敷の大半は富田城下町から引き払われ、武家地はほとんど消滅していったと考えられる。町全体に占める武家地面積の割合は高かったと推測されるので、その影響は、都市機能上は言うまでもなく、景観的にも大きかったと思われる。また松江城下には、富田から移転してきたという伝承を持つ寺社が少なくない。その意味でも、中世富田城下町と近世富田町との間には、相当な断絶があったと見ておかなければならない。

一方、富田城下町の町人（商職人）については、どの程度移転し、どの程度残留したのか等について、全くわからないと言わざるをえない。しかし、彼らがいなければ、17世紀の富田町は存在しえなかったと言っても過言ではない。以下では、富田城下町から松江城下町への町人と寺社の移転について検討する。

#### (1) 町人町の配置

堀尾氏による松江城築城と松江城下町建設の経緯については、『島根縣史』（1929年）以来、おおむね次のように説明されてきている。

慶長5年(1600) 堀尾氏が出雲・隠岐両国へ入部

慶長8年(1603) 築城許可

慶長9年(1604) 8月4日 堀尾忠氏没(28才)

慶長12年(1607) 大橋の架橋工事開始

慶長13年(1608) 本丸石垣、天守台石垣

慶長14年(1609) 天守閣建造・三ノ門坂口

・大手口枅形・大手堀石垣・二の丸御殿の着工

慶長15年(1610) 天守閣・二の丸御殿の完成

慶長16年(1611)6月17日 堀尾吉晴没(69才)

こうした記述の多くは、小笹昌栄『出雲栞』（1901年）や『千鳥城築城とその城下』（1906年）に依拠したもので、4年かけて築城したことについては蓋然性があるものの、細かな点については慎重な扱いが必要であると指摘されている（佐々木倫朗・福井将介 2016）。ただし、慶長16年正月の松江城祈祷札の存在をもって、松江城天守閣の完成を裏づけるものとみることが共通理解となっている。

松江城下町の建設は、すでに中世以来、宍道湖に面した内水面交通の物流拠点として町場が形成されていた白潟・末次の存在を前提とした事業であったと考えられる（長谷川 2013）。すなわち、もともと存在した比較的大規模な市町をそのまま活用して町人町・寺町として再編して取り込み、それらと城との間に新たな武家屋敷地を造成して建設されたものであると言える。

問題となるのは、中世の白潟・末次から、近世の町人町へ、どれだけ規模が拡大したのかという点にある。しかし、それを追跡する手がかりはほとんど残されていない。

松江城下町の町人町としては、白濁・末次以外に、北堀町や米子町などが形成された。それらは、城下町中心部の武家集住地の外縁に全く新たに建設されたと思われる点に大きな特徴がある。特に米子町は、農耕地や低湿地を含む半陸地状の場所を造成しており（渡辺正巳・瀬戸浩二 2012・2013）、計画段階から意図的にまとまりをもった形で形成されたことがわかる。「米子町」という名称は、伯耆国米子における尾高町・倉吉町と共通する来歴を推測させるものであり、おそらくは米子に拠点を持つ商職人たちが多数を占めていたと思われる。

天正 19 年（1591）に富田城へ入った吉川広家（毛利元就次男吉川元春の三男）は、出雲国 2 郡（意宇郡・能義郡）、伯耆国 3 郡（会見郡・日野郡・汗入郡）、隠岐国一國を支配したが、入部当初から米子城の建設に着手した。米子城下町もこの時期に形成されたと考えられる。この吉川氏時代に富田城下町との関係を形成した米子商職人の中に、堀尾氏時代にも引き続き富田との関係を維持し、堀尾氏に従って松江に拠点を有した者がいた可能性が指摘されている（松尾寿 2008）。それが正しければ、富田にも拠点を有した米子商職人が富田城下町において占める割合が高かったとは思えないにもかかわらず、米子町のような範囲に単独の町が形成されるほどの人数であったことは、旧来からの富田町商職人について、さらに多くの拠点移動があったことをうかがわせる事実とは言えないだろうか。

## （2）移転寺社の特徴

松江城下町周辺の寺社について、富田からの移転伝承を確認し、全体的な特徴を推測したい。典拠とするのは、元和 6 年（1620）～寛永 10 年（1633）頃の状況を示す「松江城下町絵図（いわゆる堀尾絵図）」（島根大学付属図書館所蔵）、17 世紀末～18 世紀初期成立の「千鳥城取立古説」（島根県立図書館所蔵）、享保 2 年（1717）成立の「雲陽誌」（『大日本地誌大系 雲陽誌』雄山閣、1971 年）、18 世紀半ばの「出雲録」（『松江市史 史料編 5 近世 I』松江市、2012 年）である。

### ◎密教系寺院

**千手院** 石橋町の千手院は、「堀尾絵図」にも記載されている。「雲陽誌」によれば、「真言宗 尊照山金昭寺といふ、此寺もと能義郡富田の郷にありといふ、開山の僧も開基の年代もしれず、慶長十三年堀尾帯刀吉晴富田の城をうつし松江の城を築たまふ時、長海上人に仰て地鎮の秘法を行たまふ」などと記されている。「出雲録」では、「尊照山金胎寺千手院」と記す。

**宝照院・愛宕大権現** 「堀尾絵図」の外中原「愛宕坊」「愛宕堂」に該当するものと思われる。「雲陽誌」によれば、「天台宗 愛宕山 本社は愛宕大権現 此社昔年能義郡古川村灰火山といふ所にあり……慶長の比堀尾帯刀吉晴能義郡富田の城を島根郡松江へ移たまふ時此社も今の山に移したまふといふ」と記されている。「出雲録」には、「愛宕山勝軍地蔵大権現之社 …前国主堀尾帯刀吉晴公、慶長十三戊申年ニ能義郡古川村ヨリ移中原荒隅、伊弉冉命御子父ノ神軻遇突智命也ト云々、然共世俗勝軍地蔵権現ト申侍リヌ」と記されている。

19 世紀前半頃に実地踏査を交えて描かれたと思われる千家俊栄旧蔵「富田月山城図」（千家国造家所蔵、山崎良政筆）によれば、古川村の若宮八幡宮南側丘陵上に「あたこ」と記

されており、また明治初期の「能義郡古川村絵図」（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収）などからも明らかなように、若宮八幡宮西隣の尾根の先端には「愛宕社」が存在した。

なお、最新の研究成果によって、文亀 2 年(1502)の「灰火山社記」（宝照院旧蔵文書）は、出雲国内において「出雲国風土記」に触れた文献として最古のものであり、仁多郡の馬来氏によって、その所領内の灰火山（仁多郡大谷村・小馬木村の境界にある標高 625m の山）に愛宕神を祀る祠堂を建てた際に作成されたことが明らかにされている（西島太郎 2017）。馬来氏創建の愛宕社と、富田の愛宕社は、直接的な関係はないと考えられており、由緒が転用されたものであるという。「雲陽誌」が、富田における愛宕山の所在地を古川村灰火山と記していることも、この「灰火山社記」からの影響と推測されている（同上）。

**普門院** 現在は北田町西端に位置する普門院は、17 世紀には白瀧に所在し、「堀尾絵図」によれば、その位置は現在の安栖院・明宗寺の辺りと推測される。「雲陽誌」には、「天台宗 松高山願應寺といふ、本尊不動明王弘法大師の作なり、此寺能義郡清水寺の大室坊住持賢義弟子賢清といふ僧よりをこれり、賢義は毛利元康崇敬にて同郡富田の岩倉寺の住侶としたまふ、吉川廣家の代にいたりて同所延命寺の住持として祈願所たり、富田に其古跡あり、其後堀尾帯刀吉晴の時代賢義弟子賢清を豊国の社僧となし、慶長の比島根郡市成村にて願應寺といへり、夫より豊国すたれければ賢清は……長門國へ退さらむとす、此事堀尾山城守忠晴聞給ひて…豊国のすたれたるは浮世の転変盛衰にて社僧の恥る事にあらず、富田にての例にまかせ祈願職とせんとして、則堀尾河内といふ者の下屋敷を寺地とさため一字を建立ありて、松高山普門院と名付てより代々の祈願所とす」と記されている。

**自性院** 米子町の自性院について、「雲陽誌」は、「真言宗 古義派龍寶山長久寺といふ、此寺は能義郡富田の郷にありて弘法大師の開基恵日山長久寺寶珠院といふ古院ありといひつたへり、然に堀尾帯刀富田の城を松江へ移されしより後、但州の人太田垣氏学雄といふ人富田よりうつし龍寶山長久寺自性院と改たり」と記している。

**海乗寺** 米子町の手乗院について、「雲陽誌」は、「天台宗 南龍山柳昌坊と號す、本尊不動明王なり、此寺は能義郡清水寺柳昌坊といへり、清水寺に古跡あり祈願のため富田の庄に移一字を建立し柳昌坊といふ、富田にも古跡あり、彼寺の住僧豪祐は堀尾因幡殊に崇敬し、慶長年中此地へ招我中屋鋪に寺を建て南龍山海乗寺と號し、堀尾氏代々の祈願をなすとなり」と記されている。「出雲鑑」には、「大黒山海乗院」と記されている。

## ◎禅宗寺院

**洞光寺** 新町の洞光寺は、広瀬の洞光寺とともに尼子氏の菩提寺として知られる。中世富田の洞光寺は、町帳村東側の丘陵周辺の「金尾（兼尾）」が所在地であったと伝えられており（図 6 参照）、近世以降の広瀬の洞光寺とは富田川を挟んで対岸に位置していた。

「雲陽誌」によれば、「曹洞宗 金華山と號す、本尊釈迦如来安阿弥の彫刻なり、尼子経久富田の城にありて鎮雄和尚を請待し伽藍を建立し給ふ、則経久の神主影像今猶存せり、富田落城の砌證文傳記悉紛失す、其後毛利家の領國となり数百貫の地を寄附せらる、堀尾氏富田の城を松江にうつされしより此寺も又爰に造立す、境内薬師堂あり、尊像安阿弥の作なりとて世人崇敬す、…寺寶と稱して青磁香爐花瓶聲饒鉢尼子伊豫守の寄進」などと記されている。文中に見られる薬師堂について、「出雲鑑」は「金尾薬師堂 一軀 是ハ

往古悪七兵衛景清ノ守本尊ト云」と記している。

**桐岳寺** 奥谷の桐岳寺は、「堀尾絵図」にも記載された曹洞宗寺院である。「雲陽誌」には、「禅宗 龍虎山といふ、本尊釈迦脇立文殊普賢、此寺は堀尾出雲守忠氏の次男法名桐岳宗秋童子のため、忠氏の後室長松院殿能義郡富田郷桜崎に建立ありといふ、其後富田の城松江へ移て、慶長十八年長松院殿此所へふたゝひ造立せられたり、富田の桜崎にありしによりて今に桜崎の桐岳寺といふ」と記されている。「出雲鞆」も、その所在地について「此处桜碕ト申ハ富田ノ桜碕ヨリ移ル此所ニユヘ申風俗」と記している。

富田の「桜崎」は、文明 8 年（1476）5 月 17 日京極政高感状（『佐々木文書』『出雲尼子史料集』77）や、永禄 13 年（1570）の 2 月 7 日天野隆重奉書写（『萩藩閥閥録』巻 61 宇多田十兵衛）にも現れる中世以来の地名であるが、所在地は未詳である。ただし、明治初年の「能義郡矢田村絵図」（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収）に、富田城下から北東方向へ連なる丘陵の先端に「桜ノ前」の地名があり（図 7 参照）、上記 2 通の中世史料の記載内容と位置的に矛盾はないので、「桜のさき」の遺称地である可能性を指摘できる。

富田の桐岳寺について、「日本洞上聯燈録」（『大日本仏教全書』）は、「定光竹堂利賢禅師法嗣」の「雲州桐岳寺龍岳道門禅師」に関する事蹟のなかで、次のように記している。

「参竹堂于定光……弘治丙辰（弘治 2 年 = 1556 年）付法衣、命継其席……雲州廣瀬城主、戸田氏、創桐岳寺、延為開山始祖……文禄三年（1594）三月十九日也、寿八十一」。廣瀬城主や戸田氏（毛利氏時代の富田城主富田元秋を指すかどうか定かではない）については、近世に書かれた記録であることによる誤記と思われるが、桐岳寺の創建が富田城主による発願であったことを示唆している。龍岳道門の師にあたる竹堂利賢は、伯耆国定光寺（倉吉市）住持や富田洞光寺住持を務めるなど、尼子氏と密接不可分な立場の禅僧であったが、龍岳道門もまた、永禄 9 年（1566）11 月に月山富田城が落城した際、利賢とともに最後まで城中に留まっていたと考えられ（富田下城衆書立「佐々木文書」『出雲尼子史料集』1935）、また、尼子晴久画像（島根県立古代出雲歴史博物館所蔵）に賛文を寄せていることから明らかなように、尼子氏との結びつきがきわめて強い人物であった。「日本洞上聯燈録」の没年齢（文禄 3 年 81 才 = 永正 11 年〈1514〉生まれ）を信ずるならば、龍岳道門は尼子晴久と全く同世代であったとみられる。「雲陽誌」に記された内容との関連性は不明であるが、富田の桐岳寺とは、尼子氏と結びつきの強い人物によって、16 世紀後半に創建された寺院であったことをうかがわせている。

**清光院** 外中原の清光院は、「堀尾絵図」にも記載された曹洞宗寺院である。「雲陽誌」には、「禅宗 寶鏡山 開基清光院殿古鏡無尽居士 古は神門郡杵築にありしか天正年中に能義郡富田郷塩谷といふ所に寺を移けるに、富田の城松江へうつされし時此所に建立のよしいひ傳るなり」と記される。「出雲鞆」には「宝鏡山清光院 広瀬洞光禅寺末寺 古老伝曰、此寺往古杵築ニ在之、観音堂其時神光寺支配也、其後ニ広瀬へ引ル、于今寺跡在、開山利賢和尚（竹堂利賢）明神ニ附属シ玉フ、袈裟今ハ神光寺ニ在之ト申伝ヘル」と記される。

中世の杵築清光院については、16 世紀後半～17 世紀前半に、杵築大社造営事業等において重要な役割を果たした大社本願を輩出する寺院であったことが知られている（『別火家文書』『大社町史 史料編 古代・中世』1238）。それによれば、「雲州富田ノ城下洞光

寺之末寺、天文年中ニ開基仕候」と記されていて、「雲陽誌」や「出雲鋏」の伝承とも矛盾はないと思われる。

**観音堂**（長寿寺境内） 奥谷の万寿寺は、元文2年（1736）までは長寿寺と称されていた臨濟宗寺院である（「出雲鋏」）。「雲陽誌」によれば、「禅宗臨濟派 菖蒲山といふ、…此寺は堀尾帯刀吉晴の時代瑞應寺の開山春龍和尚の建立なり、……寺内観音堂あり、此本尊は能義郡塩谷にあり、郡監龍野氏安置せり、傳云尼子義久の守本尊なり」と記されている。また、「出雲鋏」には、「観世音堂 一字 春日作 尼子伊予守経久ノ守本尊ト申伝也」と記されている。

### ◎浄土宗寺院

**誓願寺** 寺町の誓願寺は、「堀尾絵図」にも記載された浄土宗寺院である。「雲陽誌」によれば、「浄土宗 本縁山と號す、本尊（恵心の作） …慶長年中富田の城を松江へうつされし時此寺を白濁にひき来て傳譽和尚造立なり」と記されている。『広瀬町史』（1969年）によれば、安来市広瀬町石原の誓願寺（本然山）（図6参照）の二世雲譽が松江誓願寺を建立し、弟子伝譽をして住職としたという。

**専念寺** 寺町の専念寺は、「堀尾絵図」には「千念寺」の表記で記載されている。「雲陽誌」によれば、「浄土宗 無量山といふ、本尊（慈覚大師の彫刻） …能義郡富田より此所に移、誓願寺同年の建立なり」と記されている。ただし「千鳥城取立古説」では、富田からの移転とは記されていない。

**称名寺** 寺町の称名寺は、「堀尾絵図」には「正明寺」の表記で記載されている。「雲陽誌」では、「浄土宗 三昧山といふ、本尊（春日の作） …鎮守毘沙門（運慶の彫刻） …慶長年中富田より爰に移、岌把といふ僧の建立なり」と記されている。ただし「千鳥城取立古説」では、富田からの移転とは記されていない。

**東林寺** 寺町の東林寺は、「堀尾絵図」には「洞林寺」の表記で記載されている。「千鳥城取立古説」には富田からの移転寺院と記されている。

**信楽寺** 堅町の信楽寺は、「堀尾絵図」にも記載された浄土宗寺院である。「雲陽誌」によれば、「浄土宗 獨留山と號す、本尊弥陀安阿弥の作なり、慶長年中富田より此所にうつせり、開基年曆しれず」と記されている。

### ◎浄土真宗寺院

**本龍寺** 和多見町の本龍寺は、「堀尾絵図」には「本柳寺」の表記で記載されている。「雲陽誌」によれば、「真宗 …此寺富田の新市村にあつて浄専坊といへり、慶長十三年爰に本龍寺移て本龍寺と改號す、立像の阿弥陀一軀あり、聖徳太子の作寺寶の第一とす、眞光寺・三恩寺と云う末寺あり」と記されている。「出雲鋏」では、「明星山本龍寺」と記される。『広瀬町史』（1969年）によれば、広瀬町新市町の勝願寺（明星山）から分かれて一族が松江に本龍寺を建立したと伝える。

**明宗寺** 寺町の明宗寺は、「堀尾絵図」にも記載された浄土真宗寺院である。「雲陽誌」によれば、「真宗 光樹山と號す、本尊弥陀、慶長年中富田より移て釋の教誓を開山とす、圓照寺といふ寺家あり」と記されている。

**正源寺** 堅町の正源寺は、「堀尾絵図」にも記載された浄土真宗寺院である。「雲陽誌」

では「真宗 東本願寺の末流なり、往古此邊を經塚とて砂山なりしを、祐念といふ僧初て寺を建立し開山となる」と記すのみであるが、「千鳥城取立古説」によれば富田から移転された寺院とされている。

**徳泉寺** 横浜町の徳泉寺は、「堀尾絵図」に「西念寺」の表記で記載された寺院であると推測される。「雲陽誌」では「真宗 東本願寺派 西念といふ僧の開基なり」と記すのみであるが、「千鳥城取立古説」によれば富田から移転された寺院とされている。「出雲鋏」は、「雲龍山徳泉寺」と記す。「堀尾絵図」の寺号は、開基僧名によるものか。

## ◎日蓮宗寺院

**大雄寺** 外中原の大雄寺は、「堀尾絵図」にも記載された日蓮宗寺院である。「雲陽誌」によれば、「法華宗 能義郡富田の城松江へうつされし時此處へ富田より寺をひきたりといふ」と記されてが、「千鳥城取立古説」では松江城下町建設以降の建立と記される。

**慈雲寺** 和多見町の慈雲寺は、「堀尾絵図」にも記載された日蓮宗寺院である。「雲陽誌」によれば、「法華宗 啓運山と號す、本尊首題釈迦多宝、天正年中身延山十七世慈雲院日新の開基なり、當寺三祖日勤の時富田より遷て堀尾氏の陪臣牧志摩といふ者の新建なり」と記されている。「千鳥城取立古説」では、天正年間（1573～1592）ころに伯耆国米子の日長上人が開基と記されている。

**長満寺** 寺町の長満寺は、「堀尾絵図」にも記載された日蓮宗寺院である。「雲陽誌」によれば、「法華宗 圓久山といふ、本尊首題天正年中日眞上人の草創なり、富田越の後當寺二世日得の造立、施主は松島周防なり」と記されている。

**久成寺** 寺町の久成寺は、「堀尾絵図」にも記載された日蓮宗寺院である。「雲陽誌」では「久成寺」と表記され、「法華宗 本妙山といふ、本尊七字の首題釈迦多宝なり、妙光院日運を開山の第一祖とす、富田より爰に移て慶長年中造営す」と記されている。「出雲鋏」には、「開山富田十世日証大徳」と記されている。

**妙興寺** 寺町の妙興寺は、「堀尾絵図」には「妙光寺」の表記で記載されている。「雲陽誌」によれば、「法華宗 亀瀧山といふ、本尊首題釈迦多宝、開山を日徳上人と號す、此寺往昔仁多郡亀嵩村にありて大明寺といひしを、故ありて能義郡富田城下へ曳うつし、其後又松江城下に精舎を建けり」と記されている。ただし、「千鳥城取立古説」では、仁多郡馬木村に古くからあった大明寺が、城下町移転の際に願いにより松江に移転されたとし、「出雲鋏」では、仁多郡亀嵩村の大明寺を松江に移転して万治 2 年（1659）に建立したとしているので、富田からの移転とは記していない。

## ◎神社

**天神** 天神町の白瀧神社は、「堀尾絵図」に「天神」と記されている。「雲陽誌」では、「古老傳云悪七兵衛景清能義郡富田の城を築かんとて當國にくたれり、然に双眼をいたむこと甚しく心身脳乱せり、故に菅神をいのりければ忽ち靈夢ありて明を得たり、是をもつて菅廟を富田城中に遷て厚崇敬せり、その後堀尾氏亀田山に城郭を築たまふ時、富田城内の鎮守なれば先菅社を此所に建立し給ふ、別当は天台宗松林寺と號し、臨海山といふ」と記されている。「千鳥城取立古説」には、富田の洞光寺の鎮守社であったものを、堀尾忠氏の信仰により、洞光寺に先立って天神を勧請したと書かれている。

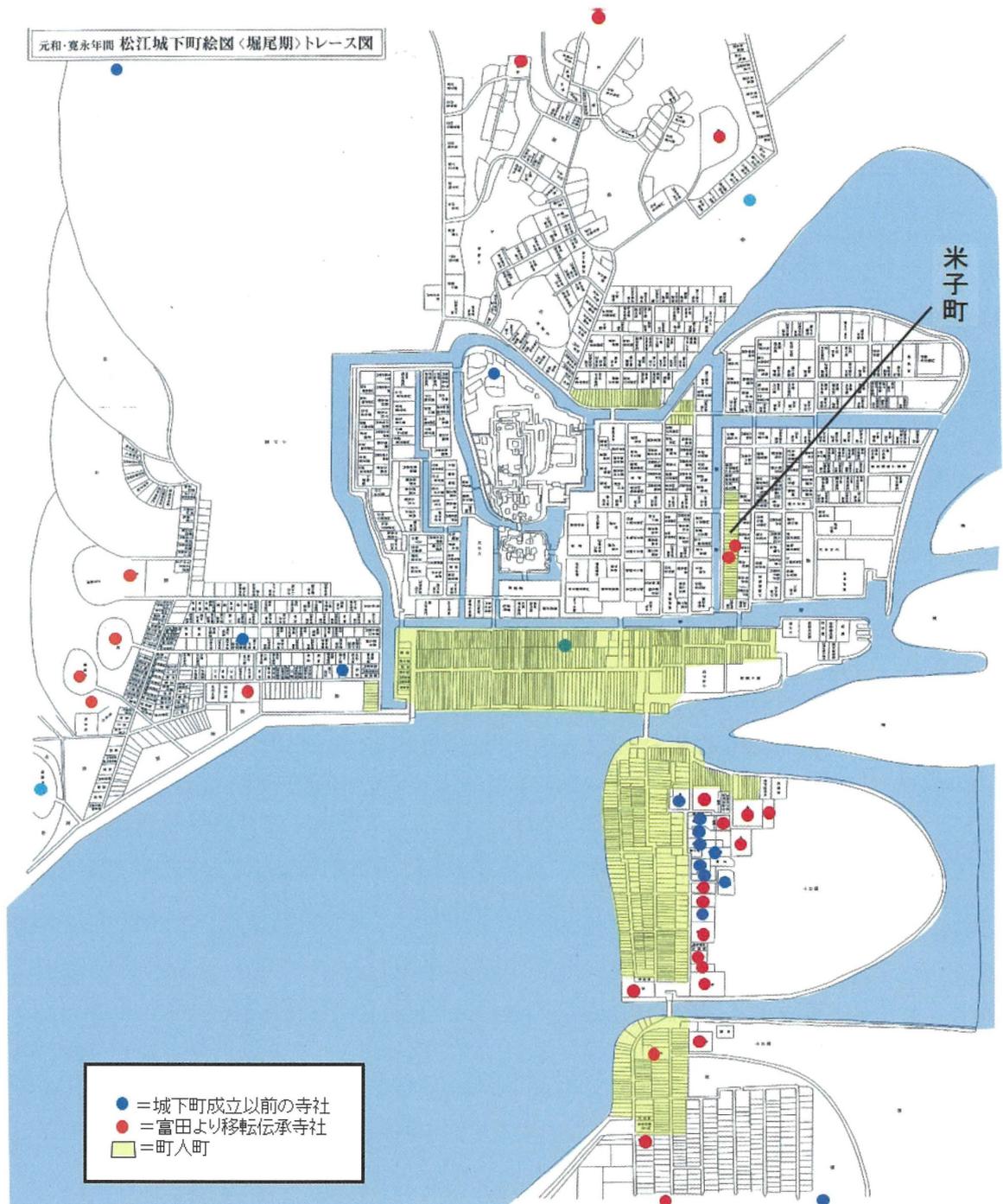


図5 近世初期松江城下町関係図（島根大学附属図書館 2006 所収トレース図を使用）

以上のように、松江城下町には、富田からの移転に関連する伝承を有する寺社が多い。ただし、それらはいずれも確実な同時代史料に基づく検証が難しく、富田城下周辺からの移転かどうか定かではない事例（妙興寺）、城下町移転以後に富田から移転したと伝わる事例（自性院・桐岳寺）、近世の伝承が複数あって富田城下町からの移転を示唆しない伝承を併せ持つ事例（専念寺・称名寺・大雄寺・天神）が含まれている点には、特に注意が必要である。また、勧請などにより、富田に本来の寺社を残したまま新たに松江城下町に

建立された事例（愛宕社・洞光寺・誓願寺）も含まれている。

それらのことをふまえたうえで、以上のような移転伝承を有する寺社には、以下のようないくつかの異なる特徴があると考えられる。

#### ◎密教系寺院 真言宗（千手院・自性院）、天台宗（宝照院・海乗寺・普門院）

密教系寺院が設置された場所については、城下町周縁の丘陵上に建立された千手院・宝照院、同じく城下町周辺の丘陵上（市成村）に設置されたと思われるものの、白潟の堀尾河内守屋敷地に再興され、後に北田町へ移転した普門院、米子町に新たに建立された自性院・海乗寺の、3つに類別される。いずれにせよ、城下町周辺の丘陵上か、武家居住地の周縁、武家屋敷地に設定されていることがわかる。注目される点は、堀尾氏・同一族の尊崇が篤く、堀尾氏一族が主導して移転されたことを明記する事例（千手院・宝照院・普門院・海乗寺）が多いことである。

#### ◎禅宗寺院 曹洞宗（洞光寺・桐岳寺・清光院）、臨済宗（観音堂）

白潟には、中世以前からの曹洞宗寺院（宗泉寺・常栄寺・安栖院・龍昌寺・全龍寺・龍覚寺）が集中していたが、富田からの移転伝承を持つ曹洞宗寺院は、いずれもそこから離れた城下町周縁の丘陵地に所在している点に大きな特徴がある。そのため、城下町建設以前からの禅宗寺院と、富田から移転された禅宗寺院は、全く異なる性格を持っていたと推測される。白潟の曹洞宗寺院は、中世以来、白潟の住人たちとの結びつきを前提として展開してきたものと思われるが、富田からの移転寺院は、洞光寺やその末寺である清光院、龍岳道門の創建と思われる桐岳寺、尼子氏の守本尊と伝えられる観音堂本尊など、いずれも尼子氏との強い結びつきを推測できる寺院ばかりであり、それを堀尾氏が引き継ぎ尊重する形で移転されたものである可能性が高い。

#### ◎白潟・寺町周辺に集中している宗派

寺院の建てられた場所の特徴からみて、以上の諸寺社と大きく異なる特徴を持っているのが、浄土宗（誓願寺・専念寺・称名寺・東林寺・信楽寺）、浄土真宗（本龍寺・明宗寺・正源寺・浜徳泉寺）、および日蓮宗（大雄寺・慈雲寺・長満寺・久成寺・妙興寺）の各移転寺院である。これらは、外中原の大雄寺を除き、いずれも白潟周辺（白潟本町・寺町・和多見町・堅町・横浜町）に集中している点が大きな特徴である。このことは、これらの寺院が、比較的計画的な形でまとめて移転された可能性を示している。その場所（白潟周辺）が、中世以来の物流拠点であったことは特に注目される点である。

また、それぞれが移転された経緯についても、密教系寺院や禅宗寺院とは明らかに異なっていて、堀尾氏一族による主導性がほとんど見られない。わずかに、慈雲寺を堀尾氏家臣の牧志摩が建てたとする伝承がある程度である。元来、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗などは、広く庶民の間に普及して、中世後期の都市や物流拠点に数多く展開したことはよく知られており、これらの諸寺院は商職人など住人たちを結びつけ、彼らの財力によって支えられていた側面が大きいと推測される。

以上のことは、白潟周辺に集中している浄土宗・浄土真宗・日蓮宗の諸寺院が、富田城下町以来の商職人たちの新たな拠点形成に伴って移転した可能性を示している。しかも、

その寺院数の多さは、少なからぬ富田城下町商職人たちが、松江城下町建設に伴って移住、もしくは活動拠点を形成したことを示す事実ではないかと思われる。そしてこのことは、中世富田城下町の町屋部分がどれだけ発展していたのかを間接的に裏づける事実であると考えられる（原慶三 1992）。

#### 4. 中世富田城下町と富田城の地域的・歴史的位置

##### (1) 中世富田城下町の痕跡

中世富田城下町に関する史料のうち、物流拠点と思われる市場地名が見られるものを例示する。

**京極政高齋感状**（「佐々木文書」『出雲尼子史料集』77）

就今度能義郡土一揆等蜂起、国中被官人等不馳来處、一身被励忠功、富田要害相抱候、戦功無比類候、殊以四月十四日、於庄塚合戦、被官打太刀抽忠節、福頼与五郎・野伏一人被疵候、同十六日於上田・古川両所打太刀、立原十郎左衛門尉・室田并野伏一人被疵候、同十九日於櫻崎打太刀、女塚仲兵衛尉被疵、野伏一人討死、五月二日於三日市打太刀、多久三郎左衛門尉并野伏一人被疵条、戦功至、誠感悦無極候、弥可被抽粉骨候、必可恩賞候也、恐々謹言、

文明八  
五月十七日  
（清貞）  
尼子形部少輔殿

政高（花押）

**岩屋寺快円日記**（「鳥取県立博物館所蔵文書」）

（前略）

一本堂香ハン、大永五年六月サシ畢、妙音院窓円奉行、  
一仏具十面通、同五月ニ富田ノ市ハヨリ買候、快円、  
一ヤリ戸モ仏具箱香ハント同前ニサシ候、

（中略）

大永七年<sup>辛</sup>十二月十三日 快円法印（花押）

**尼子義久感状**（折紙）（「蒲生家文書」『出雲尼子史料集』1314）

昨日十九日、<sup>（能義郡）</sup>於市庭面合戦之時、鉢屋掃部以鉄炮敵討伏之由神妙候、此旨可被申与候、仍状如件、

永禄八  
卯月廿日  
（幸忠）  
河本左京亮殿

義久（花押）

このように、文明8年（1476）の「三日市」、大永7年（1527）の「富田ノ市ハ」、永禄8年（1565）の「市庭面合戦」が挙げられるのみであり、これらが同じ場所のことを指すのかもよくわからない。

一方、富田川河床遺跡の出土品からは、中世に遡る遺物の出土地が特定の場所に集中することが指摘されている（日本貿易陶磁研究会 2015）。富田川河床遺跡の出土品は、ほとんどが唐津以降（17世紀）のもので16世紀に遡るものは少ないが、そのなかで例外的に唐津のない16世紀の遺構が4つ確認されている。その時期のものは新宮橋上流附近にあたるSK015・SD027・SK041・SE024に集中している（図6参照）。ただし、最も古いものでも16世紀中葉までしか遡れない。

SK015は、土壙遺構であり、出土量が最も多い。SD027は、石積み溝遺構、SK041は、土壙遺構である。最も上流に位置するSE024は、石積み井戸遺構であり、出土遺物の年代が最も古い。似たような規格の陶磁器がまとまって出土している事例があり、商品の集積する物流拠点であった可能性が指摘されている。

さらに、明治初年の地籍図（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収）によれば、富田城下町周縁に市場地名を確認できる。

一つは、植田村・中嶋村境にみられる「字三日市」である（図7参照）。これは、文明8年の「三日市」の遺称地と考えられる（原慶三 1992）。明治初期の地名としての「三日市」は、かなり広い面積を占めているが、おそらくそのなかのいずれかの場所に、中世の「三日市」が存在したことをうかがわせるものである。この場所は、能義平野が下流に向けて一気に広がる部分にあたっており、富田川の流路と、東側の丘陵北端沿いの道が交錯する場所であったと推測される。富田城下町との直接的な関係は明らかでなく、おそらくその周縁から郊外に位置して、間接的な影響関係にあった物流拠点と推測される。

もう一つは、古川村にみられる「字市場」「字紅屋」といった地名である（図7参照）。これは、従来全く知られていなかったものであるが、絵図に記された地割の痕跡は、現在でも現地において確認することができる。この辺りが、富田城下町の北東側の境界であった時期があったのではないかと思われる。「紅屋」という地名との直接の関連は不明であるが、⑨寛文8年(1668)広瀬町屋敷帳（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収）の魚町に「べにや 長右衛門」（213）を確認できる。

最後に、新宮村（明治8年以降は牧谷村・山形帳と合併して富田村となる）の町帳村境に「後谷元市前」という地名がみられることである（図6参照）。新宮谷の入り口に当り、また古川村から才の峠を越えて来る道が交錯する部分にあっている。富田城下町の南東側の境界に位置した時期があったとも考えられる。

以上のように、富田城下町に直接的に関連すると思われる物流拠点は、中世出土遺品の多い新宮橋上流附近、古川村の市場地名附近、新宮谷入口附近などを想定することができ、おおむねそれらに囲まれた範囲内に、城下町が存在した可能性をうかがわせている（図8参照）。

図6からもわかるように、旧町帳村と対岸の飯梨川両岸には、現在に至るまで特徴的な短冊形地割が残されている（明治初年の地籍図に「代地」「米成」「的場」「兼尾」「廣嶋」「大道添」「大道端東」と記された場所など）。それらのなかには、寛文6年(1666)以前からのものが含まれている可能性が高い。また、旧町帳村内に現在も残されている道筋は、何らかの歴史的背景をふまえて引き継がれてきたものと思われる（図6の破線を参照）。さらに、富田川河床遺跡から確認された道筋の一部は、こうした短冊型地割や現在の道筋

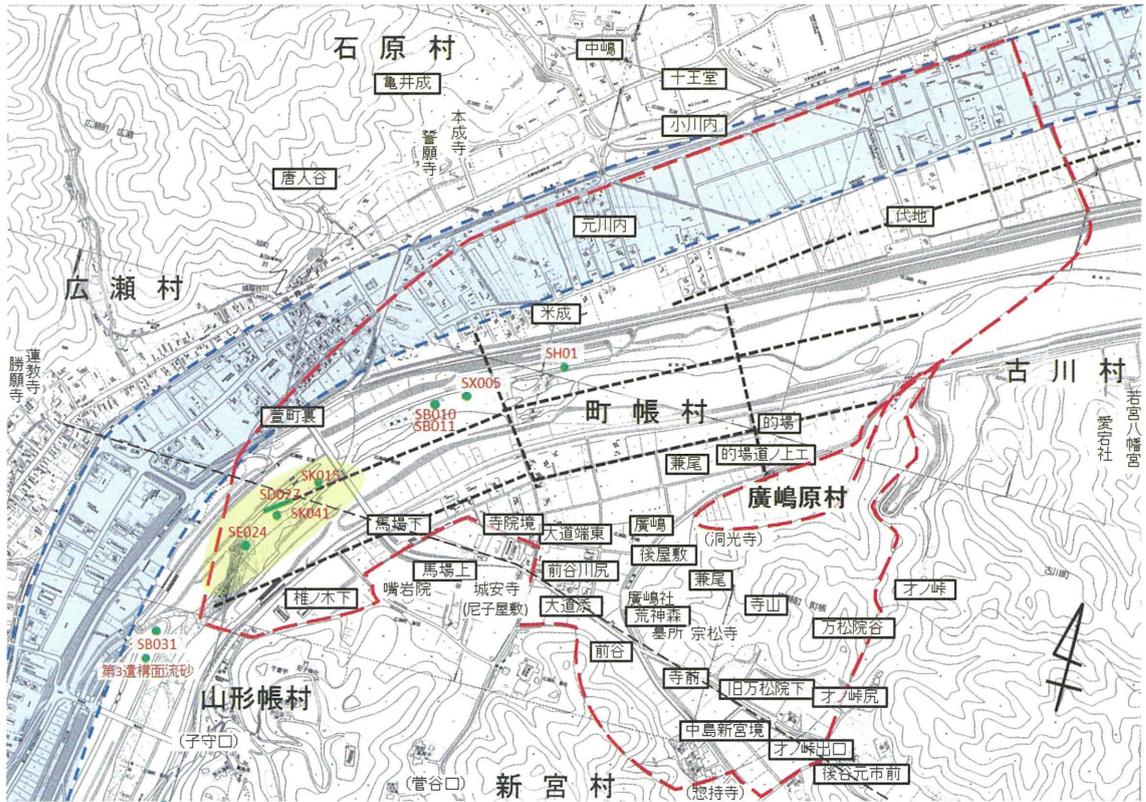


図6 明治初年の町帳村周辺地名（付、富田川河床遺跡遺構）

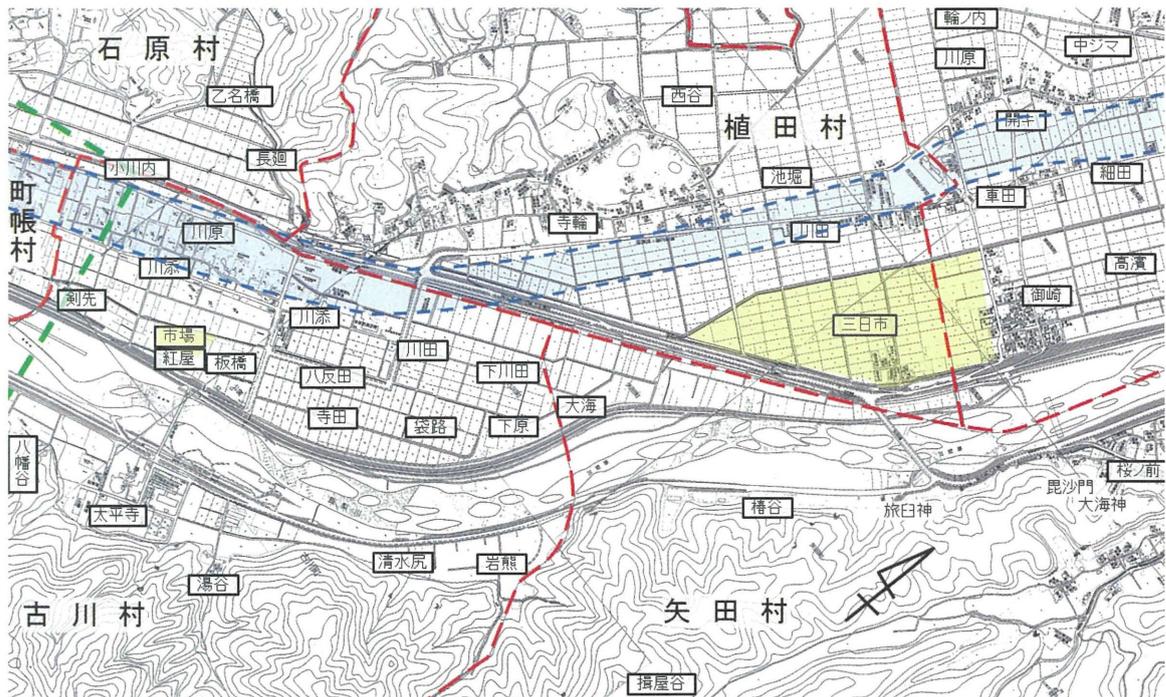


図7 明治初年の古川村・植田村・矢田村周辺地名

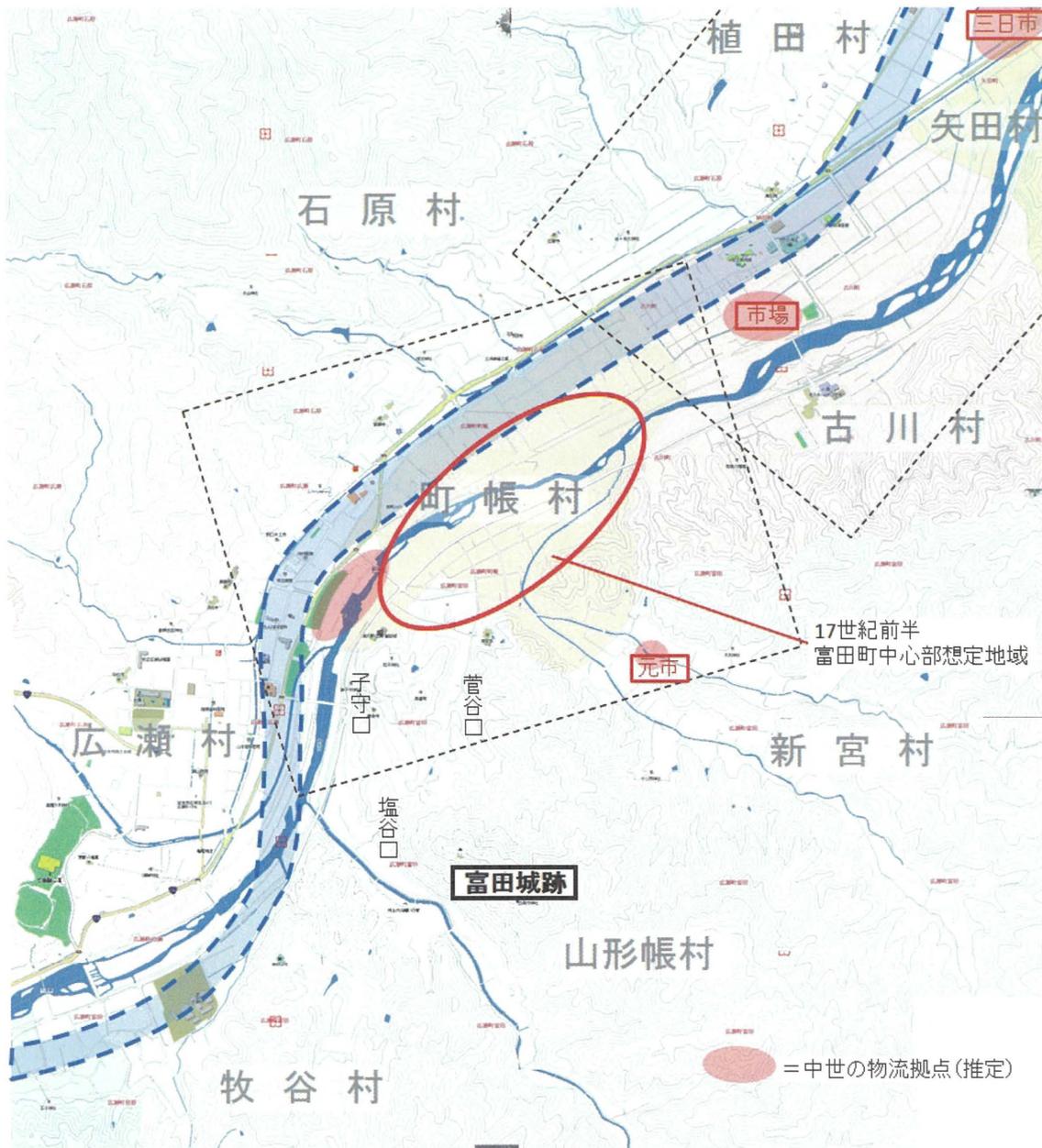


図8 富田城跡周辺図

とも、関連しているように見受けられる。さらに、それらの地割や道筋の基軸として、菅谷口へ至る道筋が重要であったことが推測され、それは明治初年の地籍図に「大道」と記された道であることがわかる。その道沿い（西側）には、寛文8年から明治35年（1902）まで城安寺があり、寛文8年富田庄城安寺領並寺地之替地申之改帳（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」8-163）によって、当時そこが「尼子屋敷」と称されていたことを確認できる。尼子氏滅亡から100年後において、菅谷口へ向かう「大道」に面して尼子氏の館があったと認識されていたことがわかる。いずれも中世富田城下町や17世紀富田町の痕跡ではないかと思われる。

このようにして、おぼろげながらも中世富田城下町の輪郭が浮かび上がってくる。

## (2) 尼子氏の拡大と富田城下町の変容

中世富田城下町について検討する際に欠かせない視点は、日本海水運との結びつきである。富田城跡の山頂から、中海・美保関・日本海を遠望できることから明らかなように、富田は単なる内陸の政治拠点ではなかったと考えられる。たとえば、安来津・揖屋浦・出雲郷津・八幡津などは富田城から 10 km 程度であり、当時の能義平野の中海沿岸（林正久・松浦和之 1987）までは 8 km 程度にすぎない。いずれも、中海の沿岸が富田と密接な関わりをもっていたことを示している。

ところで、富田を本拠とする尼子氏が飛躍的な拡大を遂げていったのは、1530 年代に入ってからのものであり、この時期には伯耆・因幡・安芸・備後・備中・備前・美作・播磨へ積極的に侵攻している。天文 10 年（1541）に、尼子詮久（尼子経久の嫡孫、のちの晴久）が安芸国吉田郡山合戦で大敗を喫し、同年に尼子経久が死去したことにより、尼子氏は大きな打撃を受けたが、晴久は、細川氏綱や三好長慶と提携して京都における三好政権成立に貢献したことによって、天文 21 年には中国地方 8 ヶ国（出雲・隠岐・伯耆・因幡・美作・備前・備中・備後）の守護職に任じられている。

富田川河床遺跡（日本貿易陶磁研究会 2015）からの出土品は、中世富田城下町の痕跡が考古学的には 16 世紀中葉までしか遡れないことを示している。また富田城関連遺跡から京都系土師器が多数出土していることから、同時期の尼子氏が京都とのつながりをも重視していたことを示している。それらは、いずれも尼子晴久が当主であった時期のものであり、晴久の志向性を裏づける事実と考えられる。

また、同時期の富田川河床遺跡からは、多数の中国・朝鮮陶磁器が出土しており、日本海とのつながりを明確に裏づけている。14～16 世紀前半の美保関は、13 世紀以来の西日本海廻船ルートのうち 小浜—美保関—隠岐ルートが重要な役割を果たし続けていたこと、14 世紀以降には、朝鮮半島・対馬・博多・石見・出雲 海域のネットワーク的な交流が活発化したことにより、その結節点として一層重要性を増したと思われる。そのような状況下において、尼子氏が 1530 年代から急激な拡大を遂げたことにより、美保関など出雲国東部の諸港湾と密接な位置関係にあった富田に、経済的隆盛がもたらされたのではないかと思われる。明治初年の石原村地籍図（広島大学所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収）には「唐人谷」という地名が残されていること（原慶三 1992）も、そのような背景があったためと推測される。

中世富田城下町が、各時期においてどこまで安定的な求心性が有していたのかはひとまず措くとしても、尼子氏が拡大し相対的に優勢であった 1530 年代後半～1540 年代の富田は、出雲・伯耆・美作はもとより、その周辺諸国にもおよぶ政治的中心機能を有した可能性が高い。そのことが経済的にも、大陸を含む西日本海沿岸各地や京都など遠隔地から、多くの文物・商品等を富田に集散させ、多数の貿易陶磁を含む出土品を生み出した可能性が高いと考えられる。

### (3) 16世紀後半の経済的変動と富田

これに対して、毛利元秋・元康（毛利元就の五男・八男）が富田城主であった時代には、美保関や富田の経済的地位は大きく変化していったと考えられる。

まず何より重要であるのは、永禄9年（1566）に尼子氏が滅亡したことによって、出雲国勢力配置が大きく変化したことである。尼子氏時代の領主のうち、毛利氏の惣国検地後の16世紀最末期まで本拠を維持したものは、赤穴氏のみである。16世紀後半の30数年の間に、出雲国内の領主はほぼ全てが入れ替わっている。

また元亀～天正年間前半（1570～1582）にかけての富田城は、尼子氏再興戦や織田氏との戦争において、毛利氏にとって最前線の直轄城群を指揮・管轄する役割を担わされ、島根半島東部周辺海域や雲伯国境地域を押さえる軍事拠点としてきわめて重要な位置を占めていた。しかしながら、毛利元秋や元康は、出雲国全域を管轄したのではないし、一般行政を担った局面は限定されていたので、尼子氏の本拠であった時代に比べると、政治拠点としての役割は大きく後退したと考えざるをえない。富田城関連遺跡の出土品について、16世紀後半に威信財が減少したことは、そのことを裏づけている。

さらに、天正19年（1591）～慶長5年（1600）には、出雲国2郡・伯耆国3郡・隠岐国が吉川広家の一円支配領となる（安芸・備中にも所領）。これは、豊臣政権の意思にもとづく吉川氏所領の準領国化と考えられ、富田は、吉川氏一円領の中心拠点としての役割を担うこととなる。したがって、この時期の富田は、もはや出雲国の政治的中心ではなく、あくまでも吉川領の本拠地である。しかも、広家が米子城と米子城下町建設を進めて本拠の移動を図ったことからわかるように、富田の政治的中心機能はさらに大きく後退していったと考えられる。堀尾氏が、入部後の早い段階から本拠移転に着手したことは、このような富田の政治的拠点としての意味の変化をふまえた判断でもあったと言える。

このことは、海域からみた拠点としての意味にも大きな影響を与えたと思われる。それは必ずしも物流量の減少を意味していないが、多数の物流拠点の発展・併存による相対的な位置づけの変化、とりわけ鉱山都市としての石見銀山の隆盛により、経済的拠点としての意味も、相対的に後退していった可能性が高い。

富田城下町の隆盛は、やはり海域全体の交流の活発化をも背景としながら、尼子氏が西日本海沿岸地域に広く勢力範囲を広げたことによってもたらされたのであって、富田を本拠とするそのような規模の勢力は、尼子氏滅亡後には二度と現れなかった。富田城下町の盛衰は、16世紀前半の時代状況と、それを具現化した尼子氏の拡大によってもたらされ、尼子氏滅亡後にはその性格を次第に変化させていったものと思われる。

堀尾氏による城下町移転と、17世紀富田町（町帳）の成立は、そのような歴史的展開をふまえて行われたものであると考えられる。

## 5. おわりに ～西日本海沿岸地域全体からみた中世富田城下町～

### ・16世紀における富田と富田城の地域的・歴史的な位置づけの変化について

西日本海地域全体からみれば、島根半島・隠岐周辺がその基軸として大きな役割を果たしたと思われる。また、九州・朝鮮半島との位置関係から、石見国以西は古くから対馬・博多などとの比較的直接的なつながりがあったものと考えられる。石見銀山隆盛期にあたる中近世移行期においては、そのような海域に直接接する場所が、政治的にも重要性を増していった可能性が高い。

16世紀前半の富田は、尼子氏の勢力範囲全体の中心拠点であり、西日本海沿岸地域にも影響力を及ぼしうる地理的条件を併せ持っていたと推測される。そのため、1540～50年代の一時期における富田は、出雲国の政治的中心拠点としての役割に加えて、国の枠組みを超えた周辺地域・周辺海域における政治的・経済的中心機能をも担う場所であったと考えられる。しかし16世紀後半になると、富田は毛利氏・吉川氏の手により政治的拠点としての役割を変化・縮小させており、経済的には美保関とともに引き続き重要な物流拠点であったものの、杵築・白潟をはじめとする西日本海沿岸の多くの港湾都市が隆盛期を迎えるなかで、相対的にはその地位を後退させていったと推測される。

### ・富田から松江への移転の地域的・歴史的な意味について

富田から松江への移転は、すでに出雲国内の中世領主層がほぼ完全に淘汰・移封された後に、特に島根半島中西部の物流拠点が相対的に影響力を拡大させた16世紀後半以来の流通構造を前提として、その管理・統制強化の必要性を十分認識して行われたものではないかと思われる（長谷川 2013）。城下町プランの類型に即していくつかの考え方があるものの、17世紀初期に限ってみれば、松江城下町は、既存の市町を利用して京橋川を境に武家地・町人地を区別した構造であるとはいえ、「総郭型」へと評価を変えた宮本雅明氏の説が、最も実態に近いものではないかと思われる（西島 2015）。松江城下町建設の第一の目的は、物流拠点を管理・統制下に置き、陸路の南北交通を遮断し、東西の水運も規制した、要塞都市としての性格が濃厚ではないかと思われる。それゆえに、堀尾氏は富田城下町商職人の拠点移動は積極的に推奨した可能性が高く、実際に多くの富田城下町商職人が松江城下町へ拠点を移動もしくは進出したと推測される。

一方の富田町は、政治的・経済的な中心機能をすでに後退させていた16世紀後半の富田城下町の一部を引き継いだものである。確実な史料によってその実像を明らかにすることは難しいが、松江城下町への大規模な武家地・町人町の移転があったことは間違いない。にもかかわらず、多種多様な職種の商職人がなお数多く居住していたことは、注目されることである。中世富田城下町がどれだけの規模であったのかを、彷彿とさせる事実と言えよう。特に、「鍛冶町」を中心に多数の鍛冶職人が集住していたと思われることや、富田川河床遺跡の出土物からは、17世紀の富田町が、出雲国仁多郡・能義郡・伯耆国日野郡など山間部から鉄原料が供給される物流拠点であったことを確認できる。そのような側面は、地理的な条件にも規定されて、松江城下町へ移転するよりも効率的な営業が期待されたことをうかがわせており、中世富田城下町以来引き継がれてきたものである可能性を指摘できる。

【参考文献一覧】

- 島根県学務部島根県史編纂掛編『島根縣史』9（1929年）  
広瀬町教育委員会『富田川河床遺跡 発掘調査報告』（1977年）  
島根県教育委員会『富田川 一飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告(4)一』  
（1984年）  
林正久・松浦和之「安来平野の地形とその形成過程」（『社会科研究』12、1987年）  
原慶三「富田城下町の研究」（尼子氏研究会『尼子氏の総合的研究』、1992年）  
島根県古代文化センター『古代文化叢書3 富家文書』（1997年）  
島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』（1998年）  
島根大学附属図書館『絵図の世界 一出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図一』  
（ワン・ライン、2006年）  
松尾寿『松江市ふるさと文庫5 城下町松江の誕生と町のしくみ』（松江市、2008年）  
山根正明『松江市ふるさと文庫6 堀尾吉晴一松江城への道』（松江市、2009年）  
安来市教育委員会『安来市史料調査報告』（2009年）  
乾隆明編『松江藩の時代』（山陰中央新報社、2009年）  
乾隆明編『続松江藩の時代』（山陰中央新報社、2010年）  
長谷川博史「中世港町安来の復元的考察」（『社会科研究』31、2010年）  
仁木宏「中世都市から近世都市へー城下町・鉦山町ー」  
（『平成22年度石見銀山遺跡関連講座・シンポジウム記録集』島根県教育委員会、2011年）  
渡辺正巳・瀬戸浩二「松江平野の古環境（1）（2）」（『松江城研究』1・2、2012・2013年）  
河原荘一郎「松江城下町遺跡の土質試験」（『松江城研究』2、2013年）  
長谷川博史『松江市ふるさと文庫15 中世水運と松江』（松江市、2013年）  
島根県古代文化センター『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』（2013年）  
西和夫『松江市ふるさと文庫16 松江城再発見』（松江市、2014年）  
乗岡実「松江城の石垣の構造と年代」（『松江市歴史叢書』7（『松江市史研究』5号）、2014年）  
渡辺正巳・瀬戸浩二「松江平野の古環境（3）」（同上）  
西島太郎『松江藩の基礎的研究』（岩田書院、2015年）  
長谷川博史「松江城下町形成前の景観と内海港湾」（『錦織勤先生ご退職記念文集』2015年）  
日本貿易陶磁研究会『中世山陰と東アジアー貿易陶磁からみる日本海交易』（2015年）  
島根県安来市『史跡富田城跡保存管理計画』（安来市、2015年）  
渡辺正巳・瀬戸浩二・山田和芳・高安克己「松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史」  
（『松江市歴史叢書』8・9（『松江市史研究』6・7号）、2015・2016年）  
松江市史編集委員会『松江市史 通史編2 中世』（松江市、2016年）  
佐々木倫朗・福井将介「いわゆる「松江城築城物語」に関する再検討」  
（『松江市歴史叢書』9（『松江市史研究』7号）、2016年）  
白石純「松江城および周辺遺跡出土瓦の胎土分析について」  
（『松江市歴史叢書』9（『松江市史研究』7号）、2016年）  
西島太郎「転用される由緒「灰火山社記」」  
（稲葉伸道編『中世寺社と国家・地域・史料』宝蔵館、2017年）

⑧寛文8年(1668)2月 富田町引料米帳

No	所在地	引料米			面			裏間口			入			肩書	所持者	備考
		俵	斗	升	間	尺	寸	間	尺	寸	間	尺	寸			
1	(萱町)	3	1												作右衛門	
2	(萱町)	3	1												与次右衛門	
3	(萱町)	3	1												四右衛門	
4	(萱町)	3	1												辰右衛門	
5	(萱町)	2													九左衛門	
6	(萱町)	3	1	3											安兵衛 六左衛門	
7	(萱町)	3	1	3											甚左衛門 工助	
8	(萱町)	3	1	3											久右衛門 甚左衛門	
9	(萱町)	3	1	3											工助	
10	(萱町)	3	1	3											久右衛門	
11	(萱町)	2		3											長兵衛	
12	(萱町)	2		3											又蔵	
13	(萱町)	4	3	6											徳右衛門	
14	是迄かや町	3	1	3											長右衛門	
15	(萱町)	6		6											三良兵へ	
16	(萱町)	7		6											平兵衛	
17	(萱町)	3	2	6											十兵衛	
18	(萱町)	3	2	6											清三郎	
19	(萱町)	4		6											市左衛門	
20	(萱町)	6	2	9											庄助	
21	(萱町)	5		6											安兵衛	
22	(萱町)	6		6											猪兵衛	
23	(萱町)	4	1	6											二郎右衛門	
24	(萱町)	4		6											十右衛門	
25	(萱町)	4	1	6											三右衛門	
26	(萱町)	4	1	6											六兵衛	
27	(萱町)	4	1	6											五郎右衛門	
28	(萱町)	4		6											九郎右衛門	
29	(萱町)	3		6											猪右衛門	
30	(萱町)	3		12											庄右衛門	年寄
31	(萱町)	3	1	3											宇右衛門	
32	(萱町)	3	1	3											吉助	
33	(萱町)	2	2	3											助右衛門	
34	(萱町)	2	3	3											清左衛門	
35	(萱町)	4	2	6											九右衛門	
36	(萱町)	2	2	3											重兵衛	
37	(萱町)	2		3											和兵衛	
38	是迄かや町	2		3											吉蔵	
39	(萱町)(上町?)	2		3											藤七	
40	(萱町)(上町?)	3	2	6											清七	
41	(萱町)(上町?)	4	2	6											利右衛門	
42	(萱町)(上町?)	2		6											千■	
43	(萱町)(上町?)	5		6											又左衛門	
44	(萱町)(上町?)	2	3	6											二郎兵衛	
45	(萱町)(上町?)	2		6											二郎左衛門	
46	(萱町)(上町?)	2		6											七三郎	
47	(萱町)(上町?)	2	3	6											惣右衛門 太助	
48	(萱町)(上町?)	2	3	6											九蔵	
49	(萱町)(上町?)	4		6											吉左衛門	
50	(萱町)(上町?)	6		6											秀三	
51	(萱町)(上町?)	3	2	6											九兵衛	
52	(萱町)(上町?)	3		6											七左衛門	
53	(萱町)(上町?)	6		12											七郎右衛門	年寄
54	(萱町)(上町?)	4		6											善五郎	
55	(萱町)(上町?)	2		6											伊兵衛	
56	(萱町)(上町?)	4	2	6											惣左衛門	
ㄨ	(萱町分?)	200	2	288												
	(以上、合計)	188	51	273												
57	(上町)	5		9											猪左衛門	
58	(上町)	3	2	6											惣兵衛	
59	(上町)	4		6											多兵衛	
60	(上町)	4		6											忠左衛門	
61	(上町)	10		9											太左衛門	當町目代
62	(上町)	4	2	6											藤左衛門	
63	(上町)	4		6											吉右衛門	
64	(上町)	4		6											四郎兵衛	
65	是迄上町	3	2	6											弥左衛門	
66	(上町)	6		6											由蔵	
67	(上町)	6		6											五兵衛	
68	(上町)	4	2	6											市太夫	
69	(上町)	4		6											宗看	
70	(上町)	2		6											安兵衛	
71	(上町)	4	2	6											與右衛門	
72	(上町)	2		6											庄左衛門	
73	(上町)	3	2	6											助右衛門	
74	(上町)	2	1	6											市右衛門	
75	(上町)	4		6										ゑかき	作右衛門	
76	(上町)	3		9											利兵衛	年寄



154	魚町	3	2	6						長右衛門	
155	魚町	3	2	6						久右衛門	
156	魚町	4		6						長兵衛	
157	魚町	4		6						治兵衛	
158	魚町	3	1	6						五兵衛	
159	魚町	2	1	5						市三郎	
160	魚町	2		3						彦左衛門	
161	魚町	2		6						五左衛門	
162	魚町	3		6						市助	
163	魚町	2	1	3						長兵衛	
164	魚町	3	2	6						彦三郎	
	魚町分	68	1	113							
	(以上、合計)	61	19	110							
165	下町	3		3						六郎左衛門	
166	下町	3	1	3						弥五兵衛	
167	下町	2		3						彦兵衛	
168	下町	3	1	3						大蔵	山伏(検地帳)
169	下町	2	1	3						清三郎	
170	下町	2	1	3						弥兵衛	
171	下町	3	1	3						五郎左衛門	
172	下町	3	1	3						三四郎	
173	下町	2		3						仁兵衛	
174	下町	3	1	3						喜蔵	
175	下町	2		3						熊蔵	
176	下町	3	1	3						市郎左衛門	
177	下町	4	2	6						仁右衛門	
178	下町	2		3						市右衛門	
179	下町	2		3						三郎兵衛	
180	下町	3	2	6						孫作	
181	下町	3	1	6						惣四郎	
182	下町	3	1	3						與次兵衛	
183	下町	3	1	3						茂兵衛	
184	下町	3	2	6						長兵衛	
185	下町	3	2	3						久三郎	
186	下町	3	1	3						善三郎	
187	下町	3	1	3						源右衛門	
188	下町	3	1	3						五右衛門	
189	下町	2	3	3						仁蔵	
190	下町	2	1	3						七兵衛	
191	下町	2	1	3						■兵衛	
192	下町	3	1	3						七兵衛	
193	下町	3	1	3						吉蔵	
194	下町	3	1	3						與吉 忠右衛門	
195	下町	2	1	3						八右衛門	
196	下町	4	2	6						傳吉	
197	下町	3	2	6						與吉	
198	下町	3	1	3						惣兵衛	
199	下町	3	2	6						與兵衛	(年寄?)
200	下町	2		6						八兵衛	
201	下町	2		6						七郎右衛門	(年寄?)
202	下町	3		6						清助	
203	下町	2	2	3						七蔵	
204	下町	3	2	6						二郎左衛門	
205	下町	3	2	6						嘉兵衛	
206	下町	3	2	6						小左衛門	
207	下町	3	2	6						徳兵衛	
208	下町	4		6						忠右衛門	
209	下町	3	1	3						又四郎	
210	下町	2	1	3						仁介	
211	下町	3	2	6						六助	
212	下町	2	1	3						長兵衛	
213	下町	2	1	3						又助	
	した町分	146	2	195							
	(以上、合計)	133	54	195							
214	清水町	2	2	3						左兵衛	
215	清水町	2	1	3						彦三郎	
216	清水町	2		6						忠兵衛	
217	清水町	2	1	3						仁助	
218	清水町	2		6						甚右衛門	
219	清水町	2		6						久右衛門	
220	清水町	2		6						市郎右衛門	
221	清水町	2		6						六右衛門	
222	清水町	2		3						平兵衛	
223	清水町	1		4						教覚坊	山伏(検地帳)
	清水町分	20		46							
	(以上、合計)	19	4	46							
224		10								鉢屋	
225		11								寺方	

⑨寛文8年(1668)3月 廣瀬町屋敷帳

	所在地	面			裏間口			入			肩書	所持者	備考
		間	尺	寸	間	尺	寸	間	尺	寸			
1	板屋町	3	1	5				16			鍬ふる屋	作右衛門	
2	板屋町	3	3					16			屋ふや	与次右衛門	
3	板屋町	3	3					16			くりだや	四右衛門	
4	板屋町	3	3					16			米や	善右衛門	
5	板屋町	3	1	5				16			阿べ屋	九左衛門	
6	板屋町	3	1	5				16			とぎ屋	安兵衛	
7	板屋町	3	3					16			志満屋	六左衛門	
8	板屋町	3	3					16			田中	甚左衛門	
9	板屋町	3	3					16			田原屋	久右衛門	
10	板屋町	3	3					16			らうそくや	又助	
11	板屋町	3	3					16			田原屋	長兵衛	
12	板屋町	3	3					16			福田や	喜右衛門	
13	板屋町	6	3					16			大工	徳右衛門	
14	板屋町	3	3					16			田原屋	長右衛門	
15	板屋町	6	3					16			中村	三良兵衛	
16	板屋町	6	3					16			水野	平兵衛	
17	板屋町	6	3					16			にへで	十兵衛	
18	板屋町	6	3					16			松屋	市右衛門	
19	板屋町	6	3					16			兵庫屋	安兵衛	
20	板屋町	9	3					16			薬屋	庄助	
21	板屋町	6	3					16			今村	猪兵衛	
22	板屋町	6	3					16			はんだや	次良右衛門	
23	板屋町	6	3					16			はんだ屋	十右衛門	
24	板屋町	6	3					16			米屋	三良右衛門	
25	板屋町	6	3					16			米屋	六郎兵衛	
26	板屋町	6	3					16			田原屋	五郎右衛門	
27	板屋町	6	3					16			面高屋	九郎右衛門	
28	板屋町	6	3					16			杵築屋	猪右衛門	
29	板屋町	12	1	5				16			灰吹屋	庄右衛門	年寄(富田町引料米帳)
30	板屋町	3	1	5				16			桶屋	治右衛門	
31	板屋町	3	3					16			紺屋	宇右衛門	
32	板屋町	3	3					16			惣田屋	吉助	
33	板屋町	3	3					16			かみや	助右衛門	
34	板屋町	3	3					16			下鞍屋	清右衛門	
35	板屋町	6	3					16			らうそくや	九右衛門	
36	板屋町	3	3					16			花屋	市兵衛	
37	板屋町	3	3					16			うすへりや	利兵衛	
38	板屋町	3	1	5				16			薬屋	清三郎	
39	板屋町	6	1	5				16			田中屋	清七郎	
40	板屋町	6	3					16			こにご	久右衛門	
41	板屋町	6	3					16			こにご	利右衛門	
42	板屋町	3	3					16			こまた	藤七郎	
43	板屋町	6	3					16			ながや	惣左衛門	
44	板屋町	6	3					16			面高屋	彦左衛門	
45	板屋町	6	3					16			米屋	又左衛門	
46	板屋町	6	3					16			魚屋	次郎兵衛	
47	板屋町	6	3					16			井筒屋	次郎右衛門	
48	板屋町	6	3					16			にへで	七三郎	
49	板屋町	6	3					16			丹波屋	太郎助	
50	板屋町	6	3					16			宍道屋	九蔵	
51	板屋町	6	3					16			長屋	清三郎	
52	板屋町	6	1	5				16			水屋	吉左衛門	
53	板屋町	6	1	5				16			山村	委三	
54	板屋町	6	3					16			井■	弥右衛門	??改組頭(富田町引料米帳)
55	板屋町	6	3					16			ながや	九兵衛	
56	板屋町	6	3					16			ながや	七左衛門	
57	板屋町	12	1	5				16			田中屋	七郎右衛門	年寄(富田町引料米帳)
58	本町	8						12			大もんじや	善五郎	
59	本町	8						12			大和屋	仁右衛門	
60	本町	9	1	5				16			田中屋	猪左衛門	
61	本町	6	3					16			米屋	惣兵衛	
62	本町	6	3					16			長谷河屋	多兵衛	
63	本町	6	3					16			長谷河屋	忠左衛門	

64	本町	9	3		16	目代	太郎左衛門	當町目代(富田町引料米帳)
65	本町	6	3		16	ゑもん屋	藤左衛門	
66	本町	6	3		16	井■	吉右衛門	
67	本町	6	3		16	田中屋	四郎兵衛	
68	本町	6	3		16	薬屋	弥左衛門	
69	本町	6	3		16	並河	生悦	
70	本町	6	3		16	田中屋	五兵衛	
71	本町	6	3		16	しらがや	市太夫	
72	本町	6	3		16		宗看	
73	本町	6	3		16	安来屋	五郎右衛門	
74	本町	6	3		16	油屋	与右衛門	
75	本町	6	3		16	田中屋	庄左衛門	
76	本町	6	3		16	伊勢屋	助右衛門	
77	本町	3	3		16	ゑとや	市右衛門	
78	本町	6	1	5	16	絵書	治右衛門	
79	本町	9	1	5	16	長谷川屋	利兵衛	年寄(富田町引料米帳)
80	本町	6	3		16	灰吹屋	傳右衛門	
81	本町	6	3		16	熊屋	惣右衛門	
82	本町	6	3		16	熊屋	安左衛門	
83	本町	6	3		16	井尻屋	三四郎	
84	本町	6	3		16	あべ屋	利右衛門	
85	本町	6	3		16	紺屋	市右衛門	
86	本町	6	3		16	麴屋	八左衛門	
87	本町	6	3		16	石原屋	善左衛門	
88	本町	9	3		16	よこたや	彦左衛門	
89	本町	6	3		16	紺屋	三郎右衛門	
90	本町	6	3		16	紺屋	傳七郎	
91	本町	6	3		16	豆腐屋	清兵衛	
92	本町	6	3		16	柳屋	七郎左衛門	
93	本町	6	3		16	米子屋	八兵衛	
94	本町	6	3		16	豆腐屋	清三郎	
95	本町	6	3		16	竹下屋	与三兵衛	
96	本町	3	3		16	くらもとや	助八	
97	本町	3	3		16	あべ屋	善三郎	
98	本町	6	3		16	紺屋	清兵衛	
99	本町	6	3		16	成田屋	利右衛門	
100	本町	3	3		16	紺屋	七兵衛	
101	本町	5	1	5	16	横田屋	与兵衛	
102	下町	3	1	5	16	笠ぬきや	仁蔵	
103	下町	3	3		16	木屋	七右衛門	
104	下町	3	3		16	笠屋	徳兵衛	
105	下町	3	3		16	岩屋	七兵衛	
106	下町	3	3		16	らうそくや	吉蔵	
107	下町	3	3		16	あべ屋	忠右衛門	
108	下町	3	3		16		ごぜ	
109	下町	6	3		16	黒坂屋	傳吉	
110	下町	6	3		16	らうそくや	惣太郎	
111	下町	3	3		16	ほちく	惣兵衛	
112	下町	6	3		16	くつ屋	与兵衛	
113	下町	6	3		16	杵築屋	八兵衛	
114	下町	6	3		16	田中屋	七郎右衛門	年寄(富田町引料米帳)
115	下町	6	3		16	くろ屋	清助	
116	下町	3	3		16	ちとりや	七蔵	
117	下町	6	1	5	16	らうそくや	次郎右衛門	
118	下町	6	1	5	16	こまた	嘉兵衛	
119	下町	6	3		16	手子	小右衛門	
120	下町	6	3		16	馬口郎	徳兵衛	
121	下町	6	3		16	比田屋	四郎右衛門	
122	下町	3	1	5	16	横田屋	五右衛門	
123	下町	3	3		16	紺屋	長兵衛	
124	下町	6	3		16	たうすや	与右衛門	
125	下町	3	1	5	16	實松屋	善十郎	
126	下町	3	1	5	16	ながや	次郎右衛門	
127	下町	3	3		16	かどや	善吉	
128	下町	3	3		16	かどや	善三郎	
129	下町	3	3		16	こかしや	又助	
130	下町	6	3		16	阿べ屋	久三郎	

131	下町	3	3			16	菅屋	茂兵衛
132	下町	3	3			16	櫛屋	与次兵衛
133	下町	6	1	5		16	らうそくや	宗四郎
134	下町	10				10	蔵元や	孫作
135	下町	5				10	かわこや	三郎兵衛
136	下町	5				10	家作	市右衛門
137	下町	6	1	5		16	紺屋	仁右衛門
138	下町	3	3			16	鍛次大工	一郎右衛門
139	下町	3	3			16	かミヤ	熊造
140	下町	3	3			16	しらがや	喜蔵
141	下町	3	3			16	紺屋	仁兵衛
142	下町	3	1	5		16	畳屋	三四郎
143	下町	5				10	田原屋	又四郎
144	下町	5				10	すかまや	仁助
145	下町	10				10	らうそくや	六助
146	下町	3				16	家作	五郎左衛門
147	下町	3				16	家作	清三郎
148	下町	3				16	針立	弥兵衛
149	下町	3				16	らうそくや	与吉
150	下町	3				16	山伏	大蔵
151	下町	3				16	米屋	彦兵衛
152	下町	3				16	伊勢屋	弥五兵衛
153	下町	3				16	かミヤ	六郎左衛門
154	鍛冶町	6				16	鍛次屋	久左衛門
155	鍛冶町	6				16	坂田屋	長兵衛
156	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	善三郎
157	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	仁助
158	鍛冶町	9				16	鍛冶屋	平右衛門
159	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	作兵衛
160	鍛冶町	6				16	鍛冶屋	三郎兵衛
161	鍛冶町	6				16	鍛冶屋	吉左衛門
162	鍛冶町	6				16	鍛冶屋	次郎兵衛
163	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	久右衛門
164	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	吉右衛門
165	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	市兵衛
166	鍛冶町	6				16	鍛冶屋	与兵衛
167	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	新吉
168	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	清三郎
169	鍛冶町	6				16	鍛冶屋	作蔵
170	鍛冶町	3				16	鍛冶屋	善四郎
171	鍛冶町	9				16	鍛冶屋	惣左衛門
172	鍛冶町	6				16	鍛冶屋	甚右衛門
173	鍛冶町	6				16	さなだ	久蔵
174	鍛冶町	6				16	らうそくや	又市
175	鍛冶町	3				16	福屋	長右衛門
176	鍛冶町	3				16	らうそくや	弥市
177	鍛冶町	6				16	らうそくや	長三郎
178	鍛冶町	3				16	田中屋	久次郎
179	鍛冶町	3				16	すゞや	三右衛門
180	鍛冶町	3				16	馬持	久造
181	鍛冶町	3				16	家作	彦作
182	鍛冶町	3				16	桶屋	喜蔵
183	鍛冶町	6				16	家作	七造
184	鍛冶町	3				16	笠屋	作兵衛
185	鍛冶町	3				16	馬持	惣右衛門
186	鍛冶町	3				16	家作	久作
187	鍛冶町	6				16	石原屋	徳兵衛
188	鍛冶町	6				16	紺屋	久兵衛
189	鍛冶町	6				16	紺屋	治左衛門
190	鍛冶町	3				16	田中屋	安兵衛
191	鍛冶町	6				16	森山屋	善兵衛
192	鍛冶町	6				16	神主	左京
193	鍛冶町	3				16	家作	仁兵衛
194	鍛冶町	6				16	田中屋	弥三兵衛
195	鍛冶町	6				16	馬口郎	次郎右衛門
196	鍛冶町	3				16	家作	喜三郎
197	鍛冶町	6				16	油屋	九兵衛

198	鍛冶町	3			16	比田屋	善四郎
199	鍛冶町	3			16	桶屋	清八
200	鍛冶町	3			16		庄兵衛
201	魚町	3			16	植田屋	庄兵衛
202	魚町	6			16	安井屋	嘉兵衛
203	魚町	6			16	かミゆひ	小左衛門
204	魚町	6			16	藪屋	市郎右衛門
205	魚町	6			16	長谷川屋	吉右衛門
206	魚町	6			16	木挽	八左衛門
207	魚町	3			16	花屋	清蔵
208	魚町	3			16	坂田屋	与八
209	魚町	3			16	あじやらや	七三郎
210	魚町	3			16	なからや	庄助
211	魚町	3			16	はりや	与十郎
212	魚町	3			16	ごきや	源助
213	魚町	6			16	べにや	長右衛門
214	魚町	6			16		久右衛門
215	魚町	6			16	櫛屋	長兵衛
216	魚町	6			16	田邊	治兵衛
217	魚町	6			16	安井屋	五兵衛
218	魚町	5			16	原田屋	市三郎
219	魚町	6			16	鍛ふる屋	彦左衛門
220	魚町	6			16	魚屋	五左衛門
221	魚町	3			16	田中屋	市兵衛
222	魚町	3			16	いぐや	市助
223	魚町	3			16	いなばや	長兵衛
224	魚町	6			16	桶屋	彦三郎
225	魚町	6			16	高濱屋	三郎兵衛
226	魚町	6			16		庄太夫
227	清水町	3			16	庄屋(?)	忠右衛門
228	清水町	6			16	畳屋	又兵衛
229	清水町	6			16	畳屋	長吉
230	清水町	6			16	紙屋	次郎兵衛
231	清水町	6			16	たかや	徳右衛門
232	清水町	6			16	家作	仁右衛門
233	清水町	4			16	神主	内記
234	清水町	6			16	紙屋	源右衛門
235	清水町	6			16	紙屋	孫兵衛
236	清水町	3			16	紙屋	市助
237	清水町	6			16	家作	助左衛門
238	清水町	6			16	家作	与兵衛
239	清水町	6			16	紙屋	四郎兵衛
240	清水町	6			16	紙屋	清左衛門
241	清水町	3			16	家作	善次郎
242	清水町	3			16	家作	善三郎
243	清水町	3			16	家作	与三郎
244	清水町	6			16	紙屋	九助
245	清水町	3			16	寺	左兵衛
246	清水町	6			16	松江屋	六右衛門
247	清水町	6			16	塩屋	市郎右衛門
248	清水町	3			16	さやし	平兵衛
249	清水町	6			16	こにご	久右衛門
250	清水町	3			16	家作	彦三郎
251	清水町	6			16	松原	正雲
252	清水町	3			16	大工	徳右衛門
253	清水町	3			16	家作	善吉
254	清水町	6			16	高橋屋	甚右衛門
255	清水町	3			16	新宮屋	仁助
256	清水町	4			16	山伏	教学坊
257	清水町	6			16		自笑

⑫元禄2年(1689)3月 廣瀬町屋敷検地帳

No.	所在地	面積 歩	面間口			裏間口			入			肩書	所持者	備考
			間	尺	寸	間	尺	寸	間	尺	寸			
1	新町	96	6			6			16			紙屋	六左衛門	
2	新町	64	4			4			16			紙屋	久五郎	
3	新町	103	6	3		6	2		16			木挽	太郎兵衛	
4	新町	114	7	2		7			16			紙屋	八兵衛	
5	新町	50	3	1		3			16				長右衛門	
6	新町	48	3	1		3			16			永屋	九兵衛	(年寄)
7	新町	48	5			5			9	3		こに子	次郎右衛門	
8	新町	57	4			4	5		13			桶屋	善兵衛	
9	新町	64	4			4			16				孫兵衛	
10	新町	96	6			6			16				仁右衛門	
11	新町	48	3			3			16				作右衛門	
12	新町	96	10	3		10	3		9	1			同人(作右衛門)	
13	新町	48	3			3			16			荒銀屋	善左衛門	
14	新町	48	3			3			16			たゝみや	吉兵衛	
15	新町	48	3			3			16				九蔵後家	
16	新町	48	3			3			16			らうそくや	九蔵	
17	新町	96	6			6			16			こに子	次郎右衛門	
18	新町	48	3			3			16				庄兵衛	
19	新町	48	3			3			16				長兵衛	
20	上町	36	1	3		1			16			土屋	五兵衛	
21	上町	112	7			7			16			馬持	五兵衛	
22	上町	64	5			10			16				権之少	
23	上町	52	3	1	5	3	1	5	16				徳右衛門	
24	上町	56	3	3		3	3		16				久兵衛	
25	上町	56	3	3		3	3		16			紙屋	勝右衛門	
26	上町	71	4	3		4	2		16			すみや	平作	
27	清水かうし式間道													
28	(上町)	60	3	4	5	3	4	5	16			永屋	九兵衛	(年寄)
29	(上町)	112	6	6		6	6		16			新出	五郎左衛門	
30	(上町)	54	3	3		3	1	6	16			こんや	九兵衛	
31	(上町)	50	3			3	1	5	16				十助	
32	(上町)	56	3	3		3	3		16			荒嶋屋	六右衛門	
33	(上町)	57	3	3	5	3	3	2	16			中屋	利兵衛	
34	(上町)	108	6	4	5	6	4	5	16			早田屋	仁右衛門	
35	(上町)	56	3	3		3	3		16			早田屋	吉左衛門	
36	(上町)	57	3	3		3	3	8	16			土屋	五兵衛	
37	(上町)	56	3	3		3	3		16			表屋	与三右衛門	
38	(上町)	105	6	3		6	4		16			山佐屋	傳右衛門	
39	(上町)	57	3	3		3	3	5	16			すみや	作右衛門	
40	(上町)	58	3	3		3	4	3	16			表屋	五郎右衛門	
41	(上町)	55	3	1	5	3	3	5	16				又兵衛	
42	(上町)	57	3	3		3	3	6	16			直江屋	文右衛門	
43	(上町)	57	3	3		3	3	8	16			若規屋	度右衛門	
44	(上町)	57	3	3		3	3	5	16			大工	吉左衛門	
45	(上町)	57	3	3	4	3	3	8	16			女房	長右衛門	
46	(上町)	51	3	1	5	3	1		16			京屋	喜兵衛	
47	(上町)	52	3	1	8	3	1	8	16			なべ屋	吉左衛門	
48	(上町)	120	7	3		7	3		16			いつか	五左衛門	
49	(上町)	53	3	1	5	3	2	3	16			ふしや	庄左衛門	
50	(上町)	53	3	1	5	3	2	5	16			新出	重兵衛	
51	(上町)	104	6	3		6	2	8	16			永屋	七左衛門	
52	(上町)	52	3	1	5	3	1	5	16			永屋	九兵衛	(年寄)
53	(上町)	53	3	1	5	3	2		16				竹矢丹波	
54	(上町)	56	3	3		3	3	1	16			面高屋	九郎右衛門	
55	(上町)	56	3	3		3	3	1	16			桶屋	喜左衛門	
56	(上町)	57	3	3	5	3	3	5	16			かた木屋	九太夫	
57	(上町)	67	4	1	5	4	1		16			かつはや	三郎兵衛	
58	(上町)	156	9	5		9	4		16				今村三左衛門	
59	(上町)	105	6	3		6	4		16				同人(今村三左衛門)	
60	(上町)	107	6	3	5	6	4	5	16			はんたや	次郎左衛門	
61	(上町)	105	6	3	5	6	3		16			塩屋	六郎右衛門	
62	(上町)	52	3	1	5	3	1	2	16			白銀屋	治右衛門	
63	(上町)	53	3	1	5	3	1	5	16			とき	善左衛門	
64	(上町)	104	6	3		6	3		16				清尾仙常	
65	(上町)	104	6	3		6	3		16				同人(清尾仙常)	
66	(上町)	53	3	1	5	3	2	5	16			なべ谷屋	忠右衛門	
67	(上町)	53	3	1	5	3	2	2	16			かつさや	半右衛門	

68	(上町)	196	12	1	5	12	1	5	16		灰吹屋	庄右衛門	年寄
69	(上町)	203	12	4		12	4		16		田中屋	七郎右衛門	年寄
70	(上町)	105	6	3		6	4		16		永屋	吉右衛門	年寄カ
71	(上町)	104	6	3		6	3		16		永屋	九兵衛	年寄
72	(上町)	104	6	3		6	3		16		いつか	五左衛門	
73	(上町)	104	6	3		6	3		16		面高屋	九郎右衛門	
74	(上町)	103	6	3		6	2		16		水	安左衛門	
75	(上町)	53	3	1	5	3	2		16		うた川	七郎兵衛後家	
76	(上町)	52	3	1	5	3	1	5	16		山路	市兵衛	
77	(上町)	103	6	3	5	6	1	5	16		たんはや	小兵衛	
78	(上町)	52	3	1	5	3	1	5	16		永屋	喜兵衛	
79	(上町)	107	6	3	8	6	5		16		山路	市兵衛	
80	(上町)	52	3	1	5	3	1	5	16		たゞみや	七左衛門	
81	(上町)	104	6	3		6	3		16			七良右衛門	
82	(上町)	52	3	1	5	3	1	5	16		はんたや	次郎左衛門	
83	(上町)	52	3	1	5	3	1	5	16		米屋	又左衛門	
84	(上町)	105	6	3	5	6	3	5	16		灰吹屋	傳右衛門	
85	(上町)	106	6	3	6	6	4		16		永屋	惣左衛門	
86	(上町)	53	3	2	2	3	1	5	16		灰吹屋	六郎兵衛	
87	(上町)	209	13		6	13			16		こに子	源右衛門	
88	(上町)	112	7			7			16		今津屋	弥兵衛	
89	下町せんたんしやうし三間												
90	(下町)	56	3	3	2	3	2	8	16		かみこや	利兵衛	
91	(下町)	59	3	4		3	4		16		田中屋	七郎右衛門	(年寄)
92	(下町)	51	3	1	8	3	5		16		横町	六三郎	
93	(下町)	53	3	2	3	3	1	5	16		いつか	五左衛門	
94	(下町)	96	6			6			16		神主	左門	
95	(下町)	58	3	2	5	3	5		16		表屋	久左衛門	
96	(下町)	54	3	3	2	3	1		16		表屋	久左衛門	
97	(下町)	59	3	4	2	3	4		16		黒坂屋	傳吉	
98	(下町)	58	3	3	6	3	4		16		茶屋	太兵衛	
99	(下町)	58	3	3	3	3	4		16		町代	吉右衛門	
100	(下町)	58	3	3	4	3	3	8	16			久兵衛	
101	(下町)	57	3	3	5	3	3	5	16			助蔵	
102	(下町)	171	10	3	6	10	4	5	16		灰吹屋	傳右衛門	
103	(下町)	108	6	4		6	5		16			久三郎	
104	(下町)	57	3	3	8	3	3		16		安部屋	忠左衛門	
105	(下町)	53	3	2	5	3	2		16		馬持	与兵衛	
106	(下町)	53	3	1	5	3	2		16			清三郎	
107	(下町)	54	3	2		3	2	5	16			久右衛門	
108	(下町)	54	3	2		3	2	5	16		ちとり	与次右衛門	
109	(下町)	53	3	1	8	3	1	8	16			茂兵衛	
110	(下町)	53	3	1	6	3	1	8	16			市右衛門	
111	(下町)	107	6	4	5	6	3	5	16			清左衛門	
112	(下町)	59	3	3	2	3	5		16			徳左衛門	
113	(下町)	104	6	3		6	3		16			庄三郎	
114	(下町)	55	3	2	6	3	2	3	16			九右衛門	
115	(下町)	55	3	2	6	3	2	3	16			嘉兵衛	
116	(下町)	104	6	3	2	6	3		16		わらや	七左衛門	
117	(下町)	107	6	4		6	4	5	16			徳兵衛	
118	(下町)	105	6	3		6	3	8	16		永屋	七左衛門	
119	(下町)	49	3			3	1		16		表屋	久左衛門	
120	(下町)	24	4	2		4	2	5	4		馬持	五右衛門 六右衛門	
121	(下町)	48	6	5		6	5	5	6		米屋	惣兵衛	
122	(下町)	48	3	2	8	3	3		7 3 5			市郎兵衛	
123	(下町)	48	3	2	8	3	3	5	8			戸右衛門	
124	(下町)	76	8	4	4	8	3	5	8 5		米屋	惣兵衛 清助	
125	(下町)	54	5	2		5	2	5	11			七郎兵衛	
126	(下町)	72	6	1		6			12			宗右衛門	
127	(下町)	36	3		3	3			12		すげや	茂兵衛	
128	(下町)	36	3		5	3			12 2		すげや	安兵衛	
129	(下町)	161	11	1		11	2		14 2			信田両無	
130	(下町)	54	5	2	1	5	2	1	10		蔵元	孫左衛門	
131	(下町)	56	5	2	1	5	1	8	10 3		蔵元	仁左衛門	
132	(下町)	55	5		6	5		6	10 4 5			三郎兵衛	
133	(下町)	65	5	3	6	5	3	5	11 4		松坂屋	平三郎	
134	(下町)	109	7			6	1	3	6 3		いさんや	善右衛門	
135	(下町)	56	3	3	7	3	2	5	16 2 5		割鉄屋	市郎右衛門	
136	(下町)	56	3	3	5	3	2	5	16		紙屋	長左衛門	
137	(下町)	56	3	3	5	3	2	5	16		しらかや	七蔵	
138	(下町)	54	3	3	2	3	1	2	16			庄兵衛	

139	(下町)	56	3	3	6	3	2	5	16	2		七兵衛		
140	(下町)	55	3	3		3	2		16			三右衛門		
141	(下町)	47	3	1	5	2	4		16		下役人	傳三郎		
142	(下町)	56	5			5	2	5	10	5		勘十郎		
143	(下町)	53	5			5		5	10	3	田中屋	伊左衛門		
144	(下町)	54	5	3	5	5	1		10		蠟燭屋	吉三郎		
145	(下町)	61	5	5		5	4		10	4	永屋	七左衛門		
146	(下町)	36	8	1	8	7	4		4	3		長吉		
147	(下町)	46	10			9	3	5	4	4		慶傳		
148	(下町)	94	6			6			15	4		十王堂		
149	(下町)	11	3			3			3	3		薬師堂 布地		
150	(下町)	51	3		5	3	1	8	16			覚平		
151	(下町)	50	3		2	3	1	3	16			定助		
152	(下町)	50	3		5	3	1		16			市蔵		
153	(下町)	50	3		3	3		8	16			喜兵衛		
154	(下町)	50	3		3	3	1	2	16			又兵衛		
155	(下町)	50	3		3	3	1		16		伊勢屋	新三郎		
156	(下町)	50	3		5	3	1		16			次郎右衛門		
157	本町	105	8	2	6	8	2	6	12	3	大和屋	善兵衛		
158	本町	105	8	2	6	8	2	6	12	3	田中屋	七郎右衛門	(年寄)	
159	本町	150	9	2	7	9	2		16		田中屋	伊左衛門		
160	本町	106	6	4		6	3	8	16		米屋	惣兵衛		
161	本町	106	6	4		6	3	8	16		米屋	惣兵衛		
162	本町	258	16	1	5	16			16		目代	太郎左衛門	目代	
163	本町	103	6	4		6	4		15	3	衛門	藤左衛門		
164	本町	51	3	2		3	1	5	15	3	こん屋	忠左衛門		
165	本町	51	3	2		3	1	5	15	3	洞光寺	忠兵衛		
166	本町	102	6	3	6	6	3	5	15	3		吉田玄柳		
167	本町	51	3	2		3	1	5	16		綿打	庄右衛門		
168	本町	51	3	2		3	1	5	15	3	ゑかき	五右衛門 六右衛門		
169	本町	52	3	2		3	2		15	3	5	大和屋	太郎兵衛	
170	本町	154	9	5	8	9	5	8	15	3	田中屋	五兵衛		
171	本町	51	3	2		3	1	5	15	4	町代	吉右衛門		
172	本町	50	3	2		3	1	5	15	2	町代	吉右衛門		
173	本町	51	3	2		3	1		15	4		与四右衛門		
174	本町	154	9	5	8	9	5	8	15	3	宇波屋	傳右衛門		
175	本町	52	3	2		3	1	6	15	5	松江屋	又左衛門		
176	本町	51	3	2		3	1	6	15	3		五郎右衛門		
177	本町	51	3	2		3	1	6	15	3		友助		
178	本町	51	3	2		3	1	6	15	3		座頭		
179	本町	103	6	4		6	4		15	3	伊勢屋	助右衛門		
180	本町	54	3	3	4	3	2	2	15	4		清兵衛		
181	本町	101	6	3		6	3	5	15	3	繪書	六右衛門		
182	本町	134	8	2	8	8	2		16			長谷川弥次右衛門		
183	本町	121	7	3	5	7	3	5	16			並河元伯		
184	本町	213	13	2		13	2		16		熊屋	惣右衛門		
185	本町	53	3	1	8	3	2	3	16		宇波屋	長三郎		
186	本町	53	3	1	8	3	2	3	16		安部	久左衛門		
187	本町	105	6	3	7	6	3		16		安部	喜兵衛		
188	本町	105	6	4		6	3		16		こん屋	忠左衛門		
189	本町	53	3	2	1	3	2		16		大東屋	又兵衛		
190	本町	53	3	2	1	3	2		16		たき屋	喜右衛門		
191	本町	53	3	2	1	3	2		16		たゞみや	長右衛門		
192	本町	53	3	2		3	2		16		亀嵩屋	仁左衛門		
193	本町	157	9	4	10				16		横田屋	彦左衛門		
194	本町	106	6	3	7	6	3	5	16		こん屋	三右衛門		
195	本町	106	6	3	8	6	3	5	16		こん屋	傳七		
196	本町	103	6	3		6	2		16		桶屋	与兵衛		
197	御蔵元かうしき間三尺													
198	(本町)	82	5	1	3	5			16			一乗院		
199	(本町)	104	6	3	2	6	3		16		いつか	五左衛門		
200	(本町)	105	6	4		6	3		16		三吉屋	作兵衛		
201	(本町)	53	3	1	5	3	2		16		新宮屋	六左衛門		
202	(本町)	109	6	5		6	4	5	16		こん屋	市郎兵衛		
203	(本町)	57	3	3	8	3	3		16		蠟燭屋	善三郎		
204	(本町)	106	6	3	2	6	4		16		こん屋	十右衛門		
205	(本町)	97	6		8	6			16		成田	利右衛門		
206	(本町)	51	3	1		3	1		16		三吉屋	作兵衛		
207	(本町)	81	4	5		5	1	5	16		馬持	清三郎		
208	(本町)	16	4			4			4		恵美須屋	藤右衛門		
209	魚町	99	6	1		6	1		16		くしや	長兵衛		

210	魚町	106	6	3	4	6	4	16	田辺屋	治兵衛			
211	魚町	49	3		3	3		3	16	石原屋	善右衛門		
212	魚町	49	3		3	3		3	16	魚屋	忠兵衛		
213	魚町	84	5	1	3	5	2	16	原田屋	平左衛門			
214	魚町	60	3	3	8	4		15	5	善四郎			
215	魚町	46	3	1	2	3		14	5	福嶋屋	与次兵衛		
216	魚町	45	3			3		15		布部屋	市三郎		
217	魚町	45	3			3		15		かさや	長右衛門		
218	魚町	48	3			3		16			徳右衛門		
219	魚町	48	3			3		16		かゝみとき	市助		
220	魚町	48	3			3		16			市郎右衛門		
221	魚町	48	3			3		16			長谷川弥次右衛門		
222	魚町	47	3			3		15	3	岩倉屋	所左衛門		
223	魚町	64	4	2	5	4	1	15		大工	安左衛門		
224	魚町	61	4		5	4		15	1	とき	平作		
225	魚町頭ノかうし三間五寸												
226	同 裏へ入かうし貳間												
227	(魚町)	68	6			6	2	11			五右衛門		
228	(魚町)	33	3	1		3		2	10	3	大工	半右衛門	
229	(魚町)	30	3	1		3		2	9	5	大工	傳之丞	
230	(魚町)	28	3		7	3		9	1	5	くしや	仁左衛門	
231	(魚町)	29	3		7	3		9	2		やからや	庄助	
232	(魚町)	39	3		8	3		12	3			仁右衛門	
233	(魚町)	35	3		5	3		11	3		くしや	長兵衛	
234	(魚町)	39	3		5	3		12	5		御馬屋	助左衛門	
235	(魚町)	41	3			3		13	3		布部屋	市三郎	
236	(魚町)	48	3			3		16			もり嶋屋	茂兵衛	
237	(魚町)	48	3			3		16	2			源助	
238	魚町中ノかうし五尺八寸												
239	(魚町)	96	6			6		16			木挽	八左衛門	
240	(魚町)	48	3			3		16			ひだや	太郎兵衛	
241	(魚町)	48	3			3		16			桶屋	十兵衛	
242	(魚町)	50	3		5	3	1	16			比田屋	久左衛門	
243	(魚町)	50	3		5	3	1	16				角蔵	
244	(魚町)	103	6	3		6	2	16			安井	嘉兵衛	
245	(魚町)	52	3	3	5	3	1	5	15	2	5	三吉屋	作兵衛
246	鍛冶町	141	8	2		9		16			かち	太兵衛	
247	鍛冶町	98	6	1		6		5	16		かち	長兵衛	
248	鍛冶町	49	3		5	3		5	16		松坂屋	平三郎	
249	鍛冶町	49	3		5	3		5	16		関屋	六郎兵衛	
250	鍛冶町	99	6	1		6	1	16			かち	傳兵衛	
251	鍛冶町	49	3		5	3		8	16			安左衛門	
252	鍛冶町	49	3			3		8	16		かち	久三郎	
253	鍛冶町	97	6	1		6		16			かち	善右衛門	
254	鍛冶町	93	6		8	6		15	2		かち	吉左衛門	
255	鍛冶町	46	3		5	3		15			かち	仁助	
256	鍛冶町	46	3		5	3		15	1		かち	次郎右衛門	
257	鍛冶町中洞光寺え入かうし貳間												
258	(鍛冶町)	46	3			3		15	2		すゝきや	長右衛門	
259	(鍛冶町)	46	3			3		15	2		家作	久次郎	
260	(鍛冶町)	47	3		3	3		15	3		かち	作兵衛	
261	(鍛冶町)	47	3		3	3		15	3		くしや	彦兵衛	
262	(鍛冶町)	50	3		5	3	1	5	15	5	福屋	長左衛門	
263	(鍛冶町)	51	3		5	3	1	5	16		らうそくや	清吉	
264	(鍛冶町)	33	2		4	2		16				六兵衛	
265	(鍛冶町)	65	4		5	4		5	16		平井	惣兵衛	
266	(鍛冶町)	49	3		5	3		16			ねつ鉄	久蔵	
267	(鍛冶町)	49	3		5	3		5	16			久兵衛	
268	(鍛冶町)	49	3		5	3		5	16		もちや	長兵衛	
269	(鍛冶町)	49	3		3	3		5	16		家作	喜右衛門	
270	(鍛冶町)	49	3		5	3		5	16			出来蔵	
271	正願寺え入かうし貳間												
272	(鍛冶町)	67	4	1		4	1	16			宇波屋	傳右衛門	
273	(鍛冶町)	49	3		5	3		2	16		桶屋	権三郎	
274	(鍛冶町)	49	3		5	3		2	16		備中屋	長兵衛	
275	(鍛冶町)	46	3		5	3		2	15	1		太郎兵衛	
276	(鍛冶町)	103	6	5	5	8		13	5		大工	文右衛門	
277	(鍛冶町)	93	5	3		6	1	16				勘太夫	
278	(鍛冶町)	51	3		5	3		2	16		今市屋	六郎兵衛	
279	(鍛冶町)	51	3		5	3		2	16			安兵衛	
280	(鍛冶町)	99	6	1		6	1	16			油屋	六郎兵衛	

281	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	家作	喜三郎				
282	(鍛冶町)	53	3	5	3	5	16	増田屋	嘉左衛門				
283	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	萩原屋	八郎兵衛				
284	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	江戸屋	市郎右衛門				
285	(鍛冶町)	49	3	3	3	5	16	らうそくや	安兵衛				
286	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	小川屋	次郎太夫				
287	(鍛冶町)	49	3	1	3	5	16	神主	左京				
288	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	田頼屋	市右衛門				
289	(鍛冶町)	149	9	1	5	9	2	16	山路屋	惣太夫			
290	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	山路屋	市兵衛				
291	(鍛冶町)	49	3	3	3	5	16	こん屋	与三右衛門				
292	(鍛冶町)	99	6	1	6	1	5	16	野沢屋	太郎兵衛			
293	(鍛冶町)	53	3	3	4	3	5	16		久右衛門			
294	(鍛冶町)	49	3	5	3	5	16	かち	徳兵衛				
295	(鍛冶町)	49	3		3	5	16	かち	市兵衛				
296	(鍛冶町)	99	6	1	6	1	16	かち	与兵衛				
297	(鍛冶町)	50	3	1	3	5	16		権右衛門				
298	(鍛冶町)	50	3	1	3	5	16	御蔵	惣兵衛				
299	(鍛冶町)	49	3	3	3	5	16	かち	八郎兵衛				
300	(鍛冶町)	49	3	3	3	5	16	かち	忠右衛門				
301	(鍛冶町)	49	3	3	3	5	16	かち	六兵衛				
302	(鍛冶町)	49	3	3	3	5	16	かち	小兵衛				
303	(鍛冶町)	99	6	1	5	6	5	16	かち	与三右衛門			
304	(鍛冶町)	88	8		3		16	かち	八兵衛				
305	御蔵元町	53	3	1	5	3	2	16		清三郎			
306	御蔵元町	53	3	1	5	3	1	5	16		仁右衛門		
307	御蔵元町	53	3	1	5	3	1	5	16		徳右衛門		
308	御蔵元町	53	3	1	5	3	1	5	16		長右衛門		
309	萱町	120	11		4		16	原田	庄兵衛				
310	萱町	137	9		8	1	16	いつか屋	市右衛門				
311	萱町	64	4		4		16	おてま	善三郎				
312	萱町	64	4		4		16		佐五内				
313	萱町	75	4	1	5	5	2	5	15	3	灰吹屋	瀬兵衛	
314	萱町	75	4	1	5	5	2	5	15	3	灰吹屋	瀬兵衛	
315	萱町	68	4		4	3	16	おてま	角内				
316	萱町	68	4		4	3	16		宇右衛門				
317	萱町	64	4		4		16		庄左衛門				
318	萱町	64	4		4		16		九郎兵衛				
319	萱町	12.5	4		4	3	3		地蔵堂				
320	萱町	55.5	4		4	3	13		惣次郎				
321	萱町	140	8	3	9		16	面高屋	九郎右衛門				
322	萱町	64	4		4		16		万之丞				
323	萱町	68	4		4	3	16		与次兵衛				
324	萱町	64	4		4		16		作兵衛				
325	萱町	64	4		4		16		六郎兵衛				
326	萱町	64	4		4		16		六郎兵衛				
327	萱町	64	4		4		16		惣右衛門				
328	萱町	64	6		6		16		市兵衛				
329	萱町	161	12		11		14	おてま	喜右衛門				
330	萱町	161	12		11		14	平野屋	惣七				
331	萱町	52.5	3	4	5	3	4	5	14		四五内	21.5歩=松/下込引=残31歩	
332	萱町	64	4		4		16		六兵衛		13歩=松/下込引=残51歩		
333	萱町	64	4		4		16		仁助				
334	萱町	64	4		4		16		長四郎				
335	萱町	64	4		4		16	高田屋	太郎兵衛				
336	萱町	64	4		4		16		傳兵衛				
337	萱町	64	4		4		16		権兵衛				
338	萱町	144	9		9		16	西城柿	庄左衛門				
339	萱町	64	4		4		16		十兵衛				
340	萱町	64	4		4		16		十兵衛				
341	萱町	64	4		4		16		作兵衛				
342	萱町	88	6		5		16		同人(作兵衛)				
343	萱町	64	4		4		16		同人(作兵衛)				
344	萱町	96	6		6		16		喜右衛門		内3尺=8歩 道二引=残88歩		
345	萱町	56	3	3	3	3	16		蓮教寺				
346	萱町	80	5		5		16		六平				
347	萱町	80	5		5		16		善兵衛				
348	萱町	40	2	3	2	3	16		勝願寺				
349	萱町	64	4		4		16		清三郎				
350	萱町	128	8		8		16		七左衛門				